

明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり

2013

12

ISSN 1340-8917



特集 ■ 古民家を活用したまちづくり

本誌は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです



1 巻頭エッセー／沖縄の優位性、潜在力の発揮に向けて

仲井眞弘多(沖縄県知事)

特集

古民家を活用したまちづくり

- | | | |
|----|----------------------------|------------------------|
| 4 | 基調論文 古民家の再生で地域活性化を | 濱崎一志 (滋賀県立大学人間文化学部 教授) |
| 8 | 北海道厚真町 古民家再生で魅力あるまちづくり | 大坪秀幸 |
| 10 | 秋田県湯沢市 旧家の住宅を地域住民に開放、交流拠点に | 泉 秀雄 |
| 12 | 茨城県 古民家レストランで地域の賑わいづくり | 塙 淳子 |
| 14 | 千葉県大多喜町 古民家を再生、体験宿泊などに活用 | 上治 信 |
| 16 | 埼玉県所沢市 都市住民に新たなライフスタイルを提案 | 峯岸祐高 |
| 18 | 岐阜県美濃市 歴史的建造物を生かしたまちづくり | 早戸智也 |
| 20 | 福井県若狭町 古民家でよみがえる宿場町 | 岡本潔和 |
| 22 | 京都市 貴重な京町家を再生、現代に生かす | 丹羽結花 |
| 24 | 兵庫県篠山市 歴史的建物をレストランや交流の場に | 村上由樹 |
| 26 | 島根県大田市 「地域の宝」の継承に向けて | 小野将史 |
| 28 | 山口県山口市 女性の視点で古民家の魅力を発信 | 松浦奈津子 |
| 30 | 徳島県三好市 「一日マルシェ」で交流の輪を拡大 | 吉田絵美 |
| 32 | 福岡県糸島市 学生主体で古民家を再生 | 坂井 猛・吉田健志 |
| 34 | 沖縄県渡名喜村 古民家民宿で島の活性化を目指す | 桃原礼子 |

レギュラーレポート

- | | | |
|----|---|------|
| 36 | リーダー塾修了者エッセー
故郷への思いから | 池田三男 |
| 37 | アンテナショップ情報
三重県の「旬」の魅力を発信! | 山本佳子 |
| 38 | 地域再生実践塾 大分県別府市
多様な地域資源を組み合わせたまちづくり | 三好皓一 |
| 40 | 移住・交流推進支援事業 和歌山県紀美野町
移住促進に向け「ほんまもん」の交流会 | 宮根恭子 |
| 42 | 地域づくり団体探訪 京都府京丹後市
ウィンズやさか野
心のこもった活動で地域にきずなを | |

- | | |
|----|-------------------------------------|
| 44 | 書籍紹介
首長の思い |
| 45 | 「あなたが好きなまち・朝来市」を目指して
多次勝昭 (朝来市長) |

センター通信

グラビア

- | | |
|----|-------------------|
| 2 | 古民家を活用したまちづくり |
| 46 | 都道府県漫遊 【北海道】 |
| 47 | 手前みそですが… 【福島県下郷町】 |



秩父夜祭のクライマックス。団子坂の曳行

問い合わせ先 埼玉県産業労働部観光課
(048-830-3695)
(写真提供 埼玉県)

また、平成26(2014)年は、秩父34ヶ所
観音霊場の午歳総開帳の年にあたります。
普段は、秘仏としてお逗留(すし)の扉は閉
じられています。総開帳では、このご本尊様
のお逗留の扉が開かれ、観音様の慈悲にふれるこ
とができる機会となります。12年に一度のこの
機会に秩父へ是非お出かけください。

秩父の総社、秩父神社の例大祭。京都の祇園
祭、飛騨の高山祭とともに「日本三大曳山祭り」
に数えられ、毎年、12月2、3の両日に行われ
ます。この祭りは江戸中期、秩父神社に立つた
絹織物の市、「絹大市」(きぬのたかまち)の経
済的な発展と共に、盛大に行われるようになり、
その後、日本を代表する祭りとして知られるよ
うになりました。祭礼当日は絢爛豪華な2台の
笠鉦と4台の屋台が曳行されます。クライマッ
クスは3日の夜で、最大20トンもある屋台・笠
鉦を引き、お旅所への急な団子坂(だんござか)
を上る様子は大迫力です。

表紙
秩父夜祭

沖縄の優位性、 潜在力の発揮に向けて

沖縄県知事 ● 仲井真弘多



沖縄県は、本土から遠隔地にあることに加え、おおよそ本州の3分の2に匹敵する広大な海域に沖縄本島を除く39の有人離島が存在し、我が国の領空、領海、排他的経済水域（EEZ）の保全など国家的利益の確保に重要な役割を果たしています。また、亜熱帯海洋性気候のもと、年間を通して温暖な気候であり、青い空、透明度の高い海、珊瑚礁に囲まれた海岸線には白い砂浜が広がるほか、ゆったりとした生活空間、先祖代々受け継がれてきた祭事、伝統的な工芸、芸能など島々で異なる魅力や資源を有しています。そして、このような島々に魅了され国内外から沖縄を訪れる観光客は、上半期としては過去最高の338万人となり、今年度の目標値630万人を達成する見込みです。

現在、沖縄県は我が国でも人口増加が続く数少ない地域であるものの、特に離島においては、若年者の慢性的な流出に伴う人口減少等、地域活力の低下が懸念されています。また、沖縄県全体でも生産年齢人口は平成27年頃をピークに減少することが見込まれています。

このため、県では、市町村、民間事業者等と連携・協働して、移住関連情報の提供及び受け入れ体制の整備や就業・起業支援等を実施し、U・J・I・Tアートを促進して参ります。また、出産・子育てと就労の両立などを産み育てる環境の充実を図り、持続的人口増加施策を展開していきます。特に離島における定住条件の整備については、交通・生活コスト等の低減による住民負担の軽減、本島の高校に進学する際の学生寮・交流拠点施設の整備、地域の実情に応じた介護サービス供給体制の整備、公営住宅などの生活環境基盤整備など、住環境や生活利便性の向上に努めて参ります。

また、長らく長寿日本一と言われてきた沖縄県ですが、平成22年の全国順位は男性が30位、女性が3位と長寿県の地位が危ぶまれる状況にあります。

このため、日本一の長寿県の復活を目指し、食生活改

善推進員等の育成・活用による生活習慣病等の改善促進のほか、地域密着型の社会体育活動等により、県民一人ひとりが日常生活において、健康的な生活習慣を実践し、健康増進が図られるよう環境を整備します。

さらに基地問題では、平成18年の日米安全保障協議委員会において返還合意された、沖縄本島中南部都市圏に存する嘉手納飛行場より南の6施設1000畝〜1500畝の着実な返還実行をこれまで以上に求めていきます。約117万人の人口規模を誇る中南部都市圏において、これらの駐留軍用地跡地は、沖縄の新たな発展のための貴重な空間であり、都市構造の歪みを是正し、県土構造の再編にもつながる大きなインパクトを持っていると確信しております。

東アジアの中心に位置する沖縄県は、かつての琉球王国の時代においては、日本、中国や東南アジア諸国等との交易・交流を展開していました。本県は、このような地理的、歴史的特長を発揮し、沖縄振興のみならず、日本経済活性化の一翼を担っていきたいと思っています。

このため、国際交流・物流拠点の形成に不可欠な那覇空港第二滑走路の整備や、那覇港旅客ターミナルの供用開始に向けた諸条件の整備に取り組めます。また、臨空・臨港型産業の集積を図り、国際物流拠点を形成して参ります。さらに、沖縄科学技術大学院大学をはじめとする高等教育機関などから生み出される研究開発成果等を活用して、新事業・新産業を創出する「知的・産業クラスター」の形成など、沖縄の優位性・潜在力を活かした施策を強力に推進していきます。

私は、県政を預かる知事として、日本のフロントランナーの気概を持ち、県民が望む沖縄の将来像・夢の実現に向け、県民はじめ多くの方々の御協力を得ながら、沖縄振興の取組をしつかりと軌道に乗せ、加速していくため、不退転の覚悟を持って、全力で取り組んで参ります。

古民家を活用したまちづくり



古民家に集う会のメンバーら。後ろに見えるのが築150年の「石秀庵」

● 秋田県湯沢市 (p10-11)



北陸地方の伝統的建築様式で建てられた古民家を見学する住民ら

● 北海道厚真町 (p8-9)



築100年の古民家の再生作業。丁寧に床板張りをする様子

● 千葉県大多喜町 (p14-15)



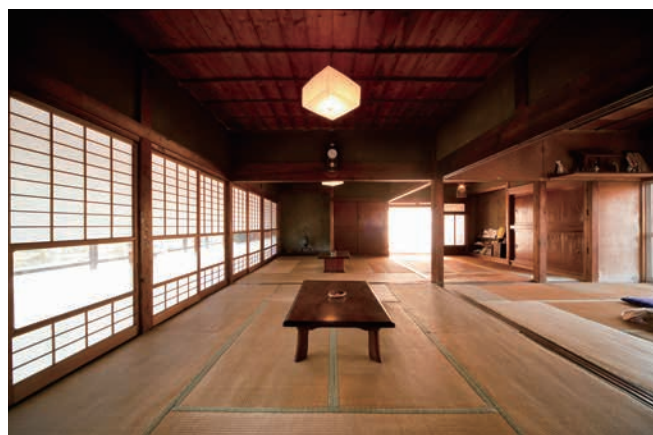
茨城県が手掛けた古民家レストラン「幸久庵」。2カ月の営業で約2,800人が訪れ、予想以上の実績だった

● 茨城県 (p12-13)



「うだつの上がる町並み」。美濃市の“顔”として観光資源になっている

● 岐阜県美濃市 (p18-19)



「古民家付き農園corot」の古民家。昔ながらの農家の暮らしが体験でき、好評だ

● 埼玉県所沢市 (p16-17)



地域住民と共に進めた再生プロジェクトでよみがえった町会所

● 京都市 (p22-23)



熊川宿の町並み。古民家が軒を連ね、歴史的な景観が維持されている

● 福井県若狭町 (p20-21)



普段使いの茶碗を持ち寄って催される熊谷家住宅（重文）での「雑ものの茶会」

● 島根県大田市 (p26-27)



篠山市福住の歴史的町並み。住民主導で古民家などの活用が行われている

● 兵庫県篠山市 (p24-25)



古民家を活用したマルシェの様子。アットホームな雰囲気が人気を博している

● 徳島県三好市 (p30-31)



古民家再生のモデルハウス「田楽庵」。田舎暮らしの体験施設にもなっている

● 山口県山口市 (p28-29)



民宿に利用されている再生古民家。赤瓦屋根が渡名喜村の古民家の特徴だ

● 沖縄県渡名喜村 (p34-35)



学生と地域住民の交流拠点「コ・ワーキングカフェ」。古民家の納屋を改修した

● 福岡県糸島市 (p32-33)

古民家の再生で地域活性化を —貴重な地域資源、多様な活用可能性—



滋賀県立大学人間文化学部 教授 ● 濱崎 一志

古民家の定義は曖昧である。通常は戦前のもので、日本の伝統的工法を用いて住居として建てられた建物を言うことが多い。最近は登録有形文化財（建造物）の「原則として建設後50年を経過したもの」と言う登録基準にあわせて、築50年を経たものと定義する人もいる。

また、古民家は町家、農家、武家住宅など用途によって造りが全く異なり、建築年代、地域、気候などの条件により、その形態、構造、意匠など極めて多様である。こうした古民家の多様性に、古民家の規模、立地、傷み具合、所有者の意向や財力など様々な要素を反映せざるを得ず、その活用計画のあり方も多様である。100棟の古民家があれば100通りの活用計画があってもおかしくない状況である。文化財としての正当性に配慮しながら、様々な条件を勘案した多様な活用計画を策定することが求められている。

この特集は「古民家を活用したまちづくり」が

テーマである。裏を返してみると「古民家が利用されていない」と言うことである。古民家は気密性が悪く空調が効きにくいこと、台所が土間であったり、水回りが昔のままであったり、生活に不便な点が多々あり、空き家になりやすい。一方で、古民家は内外観に懐かしい雰囲気が出され、内部の吹き抜けた土間空間や古材のぬくもりなどが人々を惹きつけてやまない。古民家のこうした長短を現代の生活・行動様式と上手くすりあわせていくことが求められている。

1. 古民家を取りまく現状

平成20年の住宅・土地統計調査によると、平成20年10月1日現在における全国の総住宅数は5759万戸、総世帯数は4999万世帯で、住宅数が世帯数を大きく上回っている。空き家率（総住宅数に占める空き家の割合）は、昭和33年には2%

台であったのが右肩上がりに増え続け、平成10年に11・5%となり、平成20年には13・1%となっている。今後の人口減少にともない、空き家の増加傾向は明らかである。現代的な生活環境としてはやや難のある古民家が空き家になりやすい面は否めない。

地域別に見ても、古民家を取りまく現状は厳しい。それは都市部においても、農山漁村などにおいても同様である。都市部における古民家は開発圧力に押され、次々と解体されている。平成24年に大阪府は指定文化財であった「渡辺家」の文化財指定を解除し、結果として「渡辺家」が解体されたことは、大きな衝撃であった。所有者が都市部にある古民家の敷地の相続税負担に耐えられなかったためである。文化財に指定されていても解体の可能性があることを示し、文化財として指定も登録もされていない古民家はさらに厳しい状況にあることを暗示している。



山間地域では放置され、崩れゆく古民家があちこちで見られる

一方で農山漁村などにおいても古民家を取りまく現状は厳しい。筆者がフィールドの一つとしている滋賀県の山間地域には、廃村や高度過疎集落が散在する。豪壮な古民家が放置され、静かに自然に帰る姿があちこちで見受けられる（写真参照）。

平成19年から彦根市男鬼（おおり）町の廃村において、放置されていた茅葺きの古民家の屋根の葺き替えを毎年のように行い、その活用を試みってきた（注1）。しかし、旧住民の世代交代や交通アクセスの悪さから、活用はおろか廃村となった山村の集落景観の維持すらおぼつかない状況に追い込まれている。

中山間地域においても古民家を取りまく状況は変わらない。少子・高齢化、過疎化の波が空き民家の増加を招き、集落機能が低下し、さらなる人口の流出という悪循環の中で、利用されることなく放置される古民家は増え続けている。

筆者のフィールドの一つである滋賀県長浜市の高時川上流の4集落では、空き家率が少ない集落で10%、多い集落では34%におよぶ。杉野川沿いの集落でも、少ない集落で10%、多い集落では33%に達している。空き家のすべてが古民家ではないが、これらの地域は余呉型民家と呼ばれる伝統的な民家が良く残っている地域であり、空き家のうち半数以上が古民家であり、集落によっては古民家が空き家の80%にもおよぶ。

こうした地域の世帯構成を見ると、高齢者1人世帯と高齢者2人世帯が半数を占め、中長期的に見ると、さらに悲観的にならざるをえない状況にある。

2. スマートシユリンクと 空き民家の活用

前述のような人口減少は農山漁村に限られたものではない。日本の人口は100年で半減すると言われている。こうした事態に対応するため、50年後に8000万人くらいの将来人口を想定し、国土の持続性を考え、資源・エネルギーの有限性を勘案した長期的な国土管理計画が求められている（注2）。経済成長を目指して社会資本を量的に拡大する時代は終わり、都市・農山漁村ともに生活の質を高め、人口に見合った市街地の身の丈を想定してクオリティ・ストックを順応的に形成・

凝集し、寄り添って質の高い生活を送るための土地利用改革、いわゆるスマートシユリンクへ踏み込む段階にきていると考えられている。

こうした施策が現実には推し進められると、廃村や高度過疎集落は消滅する可能性が高い。古民家は山村の文化的景観を構成する貴重な要素であり、建物単体の再評価にとどまらず、山村の文化的景観の中における価値付けを行う必要がある。一方で、地方の歴史・文化などの無形資源を活用しながら地域全体の再生を図るという視点が欠けていたこれまでの施策に対し、既存の社会資本を活用しつつ人口減少社会に対応するため都市・農山漁村の順応的凝集を図ることが提言されている。

空き家となった古民家を活用せず解体し、新たな建物を建てることは資源の無駄遣いであり、また、廃材を発生させるといふ点からも再考の余地がある。古民家は維持管理さえ怠らなければ、100年でも200年でも持続可能なものである。順応的凝集による影響を緩和するだけでなく、しなやかで余裕のある適応の方策が求められている。

3. 地域資源としての古民家

空き家となった古民家は傷みやすく、集落や町なみの景観に悪影響をあたえるにとどまらず、場合によっては倒壊の危険すらある。空き家であることは有事に即座に対応できず、防犯、防災の面でも問題となる。ただ、こうした問題は古民家を地域資源と考え、活用することにより解決するこ

とができる。もともと古民家はぬくもりのある材料で構成され、空調には適していないが広々とした大きな空間をもつことが多く、また、その地域の生活文化を現すものであり、人々を惹きつける魅力がある。

こうした魅力を活用すべく、NPO法人や民間団体、民間会社、個人が様々な活用を行ってきた。活用を支援する自治体も多く、空き家バンクを立ち上げ情報提供したり、助成金制度を設けたりしている。

地元民の交流の場、福祉・教育関連活動の場、文化芸術活動の場など「活動拠点として活用」する例、飲食店、物販店など「商業施設として活用」する例、農家民宿、中長期滞在施設など「田舎暮らし体験施設」として活用する例、移住・二地域居住の受け皿としての住宅、セカンドハウスなど「住宅として活用」する例があげられるが、極めて多様である。多様な活用の可能性をもつ古民家は、地域の活性化に欠かすことのできない地域資源と言える。

4. 古民家の活用

全国各地で多様な古民家の活用がなされてきているが、筆者も滋賀県湖東地域ではNPO法人彦根景観フォーラムに、湖北地域では湖北古民家再生ネットワークに設立以来参画し、古民家の活用の実践を進めてきた。

NPO法人彦根景観フォーラムは、平成16年から滋賀大学・滋賀県立大学、自治体職員、商工会議所・商店街連盟の職員、建築士などが幅広く集ま

り、町家居住等相談事業や空き町家の活用事業を行ってきた (<http://www.packet.ne.jp/keikan/index.htm>)。

平成17年には、彦根城下の花しょうぶ通り商店街で空き家となっていた江戸時代の寺子屋「力石」を借りて、「人と情報が集まり散ずる街なかプラットフォーム」というコンセプトの街の駅を立ち上げた。中には喫茶コーナーを構え、人の集う場所を作り上げた。これに刺激を受けた商店街の有志がLLP（有限責任事業組合）を立ち上げ、空き家を利用して街の駅2号店、3号店として開店し、NPOとは少し違った方法で地域の活性化を図ることができた（図1参照）。なお、力石については耐震補強が必要と判断され、寄付を募り補強を行ったところ、第2回日本耐震グラプリにおいて内閣総理大臣賞を受賞した。

一方、彦根の足軽屋敷の1棟が売却されることになった。辻番所という全国でも珍しい施設を併設した足軽屋敷であり、トラストを立ち上げ、市民の浄財を募った。最終的には彦根市に寄付金を委ね、所有者から買い取り、活用することができるようになった。現在、市指定文化財として解体修理中である。周辺に点在する公開可能な数棟の足軽屋敷と公開イベントを行ったり、足軽組屋敷を訪れる人々のビジター・センターとして活用する予定である (<http://tsuji-bansyo.seesaa.net/article/375445179.html>)。

また、彦根景観フォーラムは彦根市に隣接する多賀町において庄屋屋敷を譲り受けた。農村の一角に構えられた豪邸で、予約制の農家レストランとして多賀クラブが活用している

(<http://www.faga-station.com/>)。この農家レストランのメニューは、今年の、第6回地産地消給食等メニューコンテストで農林水産大臣賞を受賞した。

一方、湖北古民家再生ネットワークは平成18年から滋賀県立大学、自治体職員、建築士、不動産業者、学生、地元住民などが幅広く集まり、空き家の調査・登録、町家居住等相談事業や空き町家の活用事業を進めてきた（図2参照）。

平成20年には長浜市木之本町の空き町家におい

図1 ひこね街の駅「寺子屋力石」事業の流れ

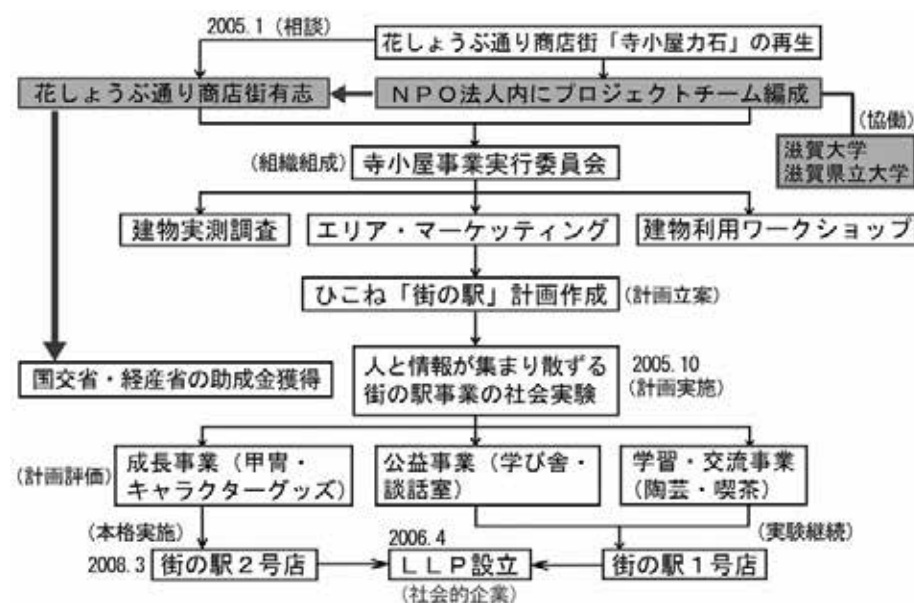
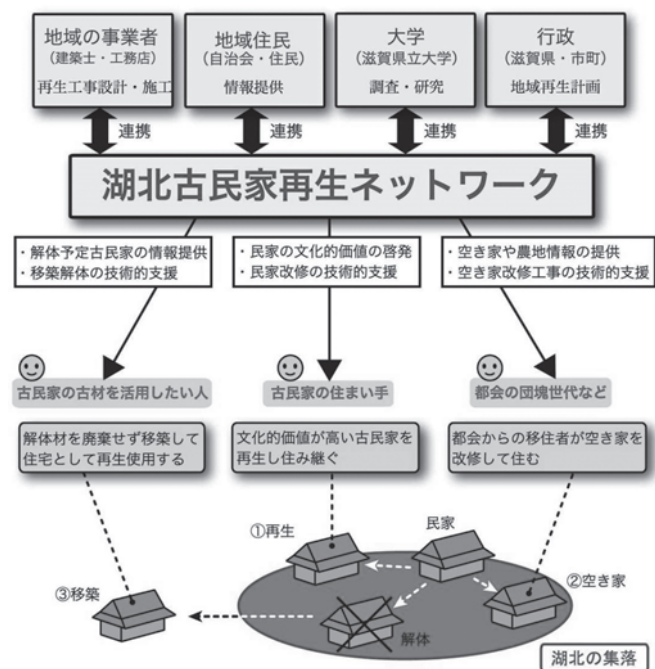


図2 湖北古民家再生ネットワークの事業概念図



て、(財)住宅生産振興財団と(財)ハウジングアンドコミュニティ財団が共同で設立した「200年住まい・まちづくり担い手事業」の支援を受け、町家の修繕体験を実施した。近年、日常の維持管理として行われていた修繕が工務店などの業者の仕事とされ、家と住み手の距離が遠のいていくことから、民家の修繕体験を通して、古民家をより身近なものと認識し、古民家の活用につなげようと実施したものである。滋賀県の内外から老若男女を問わず18名の参加を見た。修繕塾は継続して実施され、リピーターもあり、また自ら町家を改修して活用した人もいる。

平成21年には湖北移住交流支援研究会が国土交通省の地域住宅モデル普及推進事業の採択を受け、「木之本町地域住宅モデル普及推進事業(生活体験施設整備)」に取り組み、この空き町家を

改修した。現在、湖北古民家再生ネットワークが管理し、「木之本の町家暮らし 寺吉」として北国街道木之本宿の町家暮らしを体験できる施設として活用している。

さらに同様の取り組みを木之本町の農家で実施し、改修を行った。「杉野川ふるさとの家さきち」として杉野の山里の暮らしが体験できる田舎暮らし体験施設として活用している。

なお、「杉野川ふるさとの家さきち」の改修は「建前の結(ゆい)」で行われた。結とは集落の中で労働力を貸し借りし、田植え、稲刈り、茶摘み、茅葺き屋根の葺き替えなどの作業を共同で実施するものだが、杉野地域では家の建て前もこの方式が利用されてきた。このため「杉野川ふるさとの家」の改修工事は地元の人々と協働で進めることができた。古民家の再生に際し、結の新しいあり方を模索してみたい。

以上のように古民家の活用手法は、立地、規模、活用目的などにより多様である。また、古民家の改修はまとまった金額が必要となることが多い。様々な補助制度を利用できれば良いが、補助金頼みになると長期にわたる持続可能性に不安が生じる。補助金に頼るだけでなく、活用による資金的な手当て、広く寄付を募るなど多様な手法で取り組むことも必要である。

5. 今後の展望

近年、大学の役割は研究、教育、地域

貢献とされ、筆者の所属する大学も地域貢献に尽力し、最近では「域学連携」地域づくり実証研究事業や、地(知)の拠点整備事業に取り組んでいる。個々の教員が研究・教育の延長で地域づくりとかかわるのではなく、大学の総合力を活かした取り組みが求められている。地域課題として古民家を活用したまちづくりは絶好の課題であり、大学との連携を深めていくのも一つの方策と考えられる。

同時に、場当たりの古民家の保存・活用ではなく、文化財としての正当性を踏まえた上で、現代生活に適応した空間として再生する視野をもった人材の育成が求められている。

また、古民家の活用にあたり、古民家を育んできた周囲の環境や付属屋が切り捨てられることがある。裏手の畑や、蔵・灰小屋・木小屋・水屋などを解体し、主屋だけが建つ状態で活用されている例が多い。古民家は周囲の環境や付属屋とともに年月を経て、文化的景観を構成し、地域の文化を体現していることが多い。古民家の周辺環境も視野に入れた活用計画を考えていく必要がある。

(注1) 男鬼楽座「限界を超えつづける集落」『近江楽座のススメ』滋賀県立大学近江楽座学生委員会、2008、pp.22-32

(注2) 日本学術会議土木工学・建築学委員会国土と環境分科会が『提言 持続可能社会における国土・地域の再生戦略』として平成23年9月にまとめている。

古民家再生で魅力あるまちづくり —地域活性化の拠点施設に利活用—



北海道厚真町まちづくり推進課 参事

● 大坪秀幸

北海道の歴史的建造物と
厚真町の古民家

北海道における歴史的な建造物としては、国の重要文化財に指定されている北海道庁旧本庁舎（赤レンガ）をはじめ、港湾都市として栄えた小樽市や函館市などの重厚な洋風建造物、あるいは、往時のニシン漁の繁栄を今日に伝える番屋などのイメージが強い。

しかし、これらの建造物の建築とほぼ同じ時代、北海道発展の一翼を担った開拓農民が中心となり、歴史的に貴重な数多くの建築が行われていた事実も見逃してはならない。

明治から昭和初期にかけて北海道には、屯田兵以外に約72万人が移住し、そのほぼ半数が農業に従事したといわれている。これら移住者の多くは、新開地を求めて全道各地に移動し、未開地の開墾に携わった。

厚真町への移住者は、明治20年代中ごろより急速に増加したが、当時の開拓者の住居はそのほと

んどが「掘立小屋の土間に葦を並べ、その上にムシロ敷き、入口にはムシロを吊るして戸の替わりとした。」（村史より抜粋）ような、非常に簡易で粗末なものであったことが記録されている。

その後、長い辛苦の年月を経て農地の開墾を進め、農家としての土台が少しずつ安定してきた明治期後半から昭和初期ころにかけて、移住者の出身地方の建築的な特徴をもつ家屋、いわゆる「古民家」の建築が行われた。

このような古民家が、100年以上の歳月を経た現在まで、北海道の厳しい気候に耐え、今なお居住用の家屋として町内に多数現存していることは、まさに「奇跡」と言っても過言ではない。

ちなみに、古民家には、一般的に統一された定義はないようであるが、厚真町における古民家は次のすべての要件を満たす家屋としている。

① 明治、大正、昭和初期（戦前）に建築された建築物であること。

② 伝統的建築形式を持った建築物（「わく枠の内」や「かやぶき茅葺屋根」など）であること。

③ 居住用として利用されている（されていた）建築物であること。

④ 専門家または有識者が保存・再生の必要性を認めた建築物であること。

町内に「北陸様式」の古民家16軒、注目浴びる

実はつい最近まで、厚真町の「古民家」の存在は、一般にはあまり認識されておらず、したがって世間から注目されることもなかった。

ところが2009年、教員生活の定年退職を機に故郷へのUターンを決意した本町出身者が、先代が100年以上守り続けてきた家屋を居住用に移築・再生したことが契機となり、この状況は一変した。



移築予定の古民家の見学会



移築予定の古民家の内部。「杵の内」という特徴的な梁組構造を持っている



移築予定地の「フォーラムビレッジ」

この家屋は、大変太い特徴的な二重梁の構造をもつ越前型民家（福井県）で、移築・再生工事に際しては、古民家再生の促進や伝統的建築工法の伝承などを目的に設立された「NPO法人北の民家の会」が関わり、家屋の解体や再生工事における現場見学会、完成時のシンポジウムなどを積極的に開催していた。

また、この移築・再生工事が縁となり、「北の民家の会」の理事長で札幌市立大学教授でもある羽深久夫先生の全面的な協力を得て、町内全域を対象に古民家調査を行った結果、厚真町内には北陸3県（富山、石川、福井）の伝統的な建築様式をもつ明治から大正期の古民家が最低でも16軒あることが確認された。これほど多くの古民家の現存は、過去の道内にも例がない、まさに驚くべき出来事となった。

これらの取り組みは、地元マスコミも注目する

ところとなり、たびたび新聞やテレビ等で報道されたため、厚真町の古民家は、一躍世間の注目を浴びる存在となった。

古民家再生推進協議会が発足

全町調査により確認された古民家の実態は、所有者（居住者）の高齢化や建物の老朽化が進み、既に空き家として放置された物件もあるなど、一刻も早い対策が必要な状況にあった。

そこで、2011年7月、地域に残る貴重な古民家の保存や古民家を活用した地域振興策について協議することを目的に、大学教授（札幌市立大学羽深教授）や建築技術者、北海道庁職員、古民家が多数残る地域の住民など10名のメンバーによる「厚真町古民家再生推進協議会」が発足した。

この協議会では、約半年間にわたり、厚真町の

古民家の現状や古民家保存の必要性、古民家の再生とその活用のあり方などについて協議を重ね、2012年2月、「厚真町古民家再生に関する提言書」を

取りまとめ、町長に提出した。

町では、この提言内容を尊重し、今後の古民家の保存・再生の取り組みを推進していく考えである。

古民家を移築、地域活性化の拠点に

こうした中、古民家の調査や見学会などでたびたび協力をお願いしていた町民から、町に対し古民家（16軒のうちの1軒）を寄附したいという思わぬ申し出があった。

この古民家は、明治42年に建築された「杵の内」という特徴的な梁組構造をもつ越中造民家（富山県）で、このタイプの古民家は、現在町内で10軒が確認されている厚真町を代表する古民家である。

早速、町では、古民家の利活用を図るため、昨年度（2012年度）「厚真町古民家再生基本計画」を作成し、現在は、来年度（2014年度）の移築・再生工事に向けた準備を進めている。

この古民家は、里山をイメージする「フォーラムビレッジ」という自然豊かな住宅地の入り口部分に、新たな交流施設として移築・再生整備することを予定している。この整備には、社会資本整備総合交付金の導入を見込んでいる。

なお、将来的には、この場所での更なる古民家の移築・再生も見据え、古民家の希少性を活かした地域活性化のための拠点施設として、交流人口の増加や観光・特産品PRなどに有効活用していきたい。

旧家の住宅を地域住民に開放、交流拠点に ―地元の偉人を顕彰、インターネット放送も―

湯沢市古民家に集う会 副会長
古民家石秀庵庵主

● 泉 秀雄

旧家・高橋家の住宅を購入

2010年3月、秋田県湯沢市で長いこと地域の肝煎りや村長を歴任した旧家である高橋家の住宅が売りに出された。

この住宅は、正作の家とも言われていた。高橋正作は、天保の大飢饉（当時の秋田県の人口は約40万人、そのうち10万人が餓死したと伝えられている）の時、私財をなげうち、村人550余人を飢えから救い、1人の餓死者も出さなかったという人物である。住宅は安政年間に建てられた150年以上たった家である。敷地面積は約980坪（約3200平方メートル）、建物の床面積は蔵を含め約200坪（約660平方メートル）あり、子孫の方が秋田市で暮らしているため維持に困り売りに出したのだった。

新聞などで読んだことのある高橋正作の家とはどのような家か、今なら見られると思いい見に行っただけだったが、買いに来た人達は、「こんな古

い家は壊してしまえ」、「俺はこの国道に面した広い土地が欲しいんだ」などという人がほとんどだった。そこに変な義憤を感じ、つい私が買うと言ってしまった。

お金があるわけではないが、丁度、この古民家が売りに出された3月末で市役所の定年退職だったので、その退職金を当てにして購入したが、何に使うか具体的な目的があったわけではない。市役所の生涯学習関係の仕事が長かったので、「近くの人が集まれる私設公民館にでもしたいな」と漠然と考えていた。初めは家の名前を「聖老農・高橋正作の家石秀庵」と名付け、囲炉裏での宴会や、展示などに使っていた。

「古民家に集う会」発足

2011年、そこに地元の町おこしNPOに勤めている鎌田洋平君という若者が、機関紙の取材に訪ねて来た。

「買ってはみたがどう使えばよいか、維持費の



古民家「石秀庵」の外観。地域の人々に開放され、様々な活動に利用されている

捻出に困っている」と言ったら、「じゃあ私を住まわせてください、NPOの安給料でアパート代が大変ですし、ここを安く貸してくれたら私も助かります。私の家賃で幾らかでも維持費に回せますよ。また私も休みの日には維持のため手伝います」と言うので、なるほど、と承諾をした。

この鎌田君が今の「古民家に集う会」の事務局長である。彼の発案で古民家に集う会の会員を集めることになった。イベントや古民家が好きな人が集まってきたので、初めての総会を2012年3月末に開き、会を発足。会の名称、目的、事業、役員などを次のように決めた。

名称、古民家に集う会

目的、地域の偉人・高橋正作を多くの人に知ってもらいながら、古民家・石秀庵を開放、個人、団体が集い、活用してもらうこと



古民家に集う会のメンバーらによる座談会。左から3人が筆者。インターネットでも放送された



高橋正作に関する講演会の模様

事業、

- ① 古民家生活・農作業体験事業
 - ② 高橋正作の偉業伝承事業
 - ③ 学校と連携した授業づくり事業
 - ④ 蔵活用事業
 - ⑤ 地域のガイドツアー受け入れ事業
 - ⑥ その他、当会の目的に必要と認められる事業
- 会長、佐々木 功（一級建築士）

◆◆◆ 地元の偉人・高橋正作のDVD制作

こうして「古民家に集う会」はスタートしたが、発足1年目の2012年の目玉事業は、高橋正作のDVDの制作だった。

集う会の最初の事業ということで、湯沢市から補助金をもらったので、まずは高橋正作を顕彰するため、「村守る、命かけても」聖老農高橋正作

物語」と題して2枚組みのDVDを作った。

1枚目には聖老農高橋正作物語として湯沢西小学校4年生が作った紙芝居を地元の「FMゆーとぴあ」のアナウンサーにナレーションしてもらい、収録するとともに、少しでも私の古民家「石秀庵」の案内を入れた。

2枚目には、「村守る命かけても」という高橋正作に関する本を出している市立三関小学校教諭・築瀬均先生の講演と古民家に集う会会員の座談会を収録した。

これらのDVDは図書館などに配布したほか、1組1000円で販売し、高橋正作の顕彰活動に一役買っている。

また地域のお母さん方や子どもたちによる「古民家お掃除隊」を結成した。お母さんや子どもたちは2カ月に1回程度、2時間ほど石秀庵を掃除。そのあと、料理の講習会や包丁の研ぎ方教室、餅

つき、農作業体験などいろいろなメニューを楽しんでいるが、子どもたちに一番人気があるのは石秀庵の裏の広い畑の真ん中での枯れ枝を集めての焚き火である。

このような田舎でも規制がうるさく、なかなか

か焚き火なんかできないが、広いし、枯れ枝を燃やし栗や芋を焼くくらいはできる。お母さん方にも好評だ。

このほかコンサートの開催、古民家に集う会のホームページ作成、女子大生の古民家ワークシヨップなどさまざまな活動を展開した。

◆◆◆ 地域の人々の交流拠点に

2年目の今年はインターネット放送「古民家に集う会TV（こみテレ）」を開局した。私たちの年代では思いも付かない発想であるが、若い人達はいとも簡単にテレビ番組まで作り発信してしまう。

このインターネット放送では高橋正作の紹介、古民家に集う会の活動内容、ほかの古民家関係の団体との交流の模様などを各1時間程度放送した。今年は既に湯沢市よりの補助分6回の放送が終了してしまったが、補助外でもこれから何度か発信しようとして張り切っている。若者のパワーは素晴らしい。また放送内容はYouTubeでも配信した。

このほか、古民家お掃除隊の農作業体験、市民活動フェスタへの参加、蔵シアター開設などの活動を行った。

古民家に集う会では、今後も優れた農業指導者だった高橋正作の偉業を伝えながら、この貴重な古民家「石秀庵」を地域の人々が気軽に集まり、交流できる拠点として活用していきたいと考えている。

古民家レストランで地域の賑わいづくり —都市住民呼び込み、県北地域の活性化狙う—

茨城県企画部地域計画課県北振興室 係長 ● 埴 淳子

県北地域を取り巻く環境

茨城県の県北地域は、東京から100～150キロと首都圏の近郊に位置しながら、里山の風景や変化に富んだ海岸線などの豊かな自然と、四季折々の豊富な農林水産物に恵まれた国内有数の食材の宝庫である。

一方、人口減少や少子高齢化の進行など地域を取り巻く環境が厳しい状況にある中で、東日本大震災や東京電力福島第一原発の事故の影響により、農林水産業や観光業は多大な風評被害を受けており、県内外との交流人口も大きく落ち込むなど、地域の活力低下が懸念される。

都市の幅広い世代を呼び込む

茨城県では、こうした県北地域の活性化を目的として都市に暮らす幅広い世代の方々が、地域住民とふれあいながら、安心・快適なスローライフ

を楽しむ「いばらきさとやま生活」を提案し、移住・二地域居住の受け入れや交流人口の拡大を推進している。その取り組みの一環として、平成20年度から、古民家等の遊休施設と県北地域の豊富な食資源を活用した地域活性化策について、市町や民間企業と一緒にワーキングチームを立ち上げ、検討を重ねた結果、古民家レストランプロジェクトがスタートすることになった。

古民家をレストランに、予想上回る実績

初年度（平成21年度）のレストラン事業として選定したのは、常陸太田市幸久地区にある築61年の古民家。長期間空き家となっていたが、所有者による定期的な清掃やメンテナンスが行われていたため、建物・庭園とも非常に良好な状態であった。このため、古民家の落ち着いた雰囲気の中で庭園と食事を楽しめる和食レストラン「旬菜和膳幸久庵」を開店することとした。

しかしながら、食品衛生法や建築基準法、消防

法による許可手続きから、浄化槽の設置まで、開店に向けた準備は多岐にわたり、古民家を飲食店にすることは、決して簡単なことではなかった。また、開店からしばらくは、料理の提供や問い合わせ対応などのオペレーションがスムーズでないなどいくつかの問題が発生したが、改善を重ね課題をクリアすることによって、今後のレストラン事業に繋がる多くのノウハウを培うことができた。

「幸久庵」（客席数28席）は平成21年9月12日から11月14日まで57日間営業し、来店者は計2809名に上った。売り上げは500万円を超え、当初の事業計画を大幅に上回る営業実績となった。何よりも「幸久庵」に惹かれ静かな農村に多くの人が訪れ、大きな賑わいが生まれたことは、本事

古民家レストラン事業の実績

- 平成21年度 「旬菜和膳幸久庵」
 - ・場 所：常陸太田市幸久地区の古民家、築61年
 - ・期 間：平成21年9月12日～11月14日（営業日数57日）
 - ・来店者数：2,809名（52名/日、座席数28席）
 - ・売り上げ：5,182千円（96千円/日、客単価1,845円）
- 平成22年度 「里美の古民家」
 - ・場 所：常陸太田市里美地区の古民家「荒蒔邸」、築150年以上
 - ・期 間：平成22年9月25日～11月20日（営業日数49日）
 - ・来店者数：6,124名（125名/日、座席数60席）
 - ・売り上げ：23,809千円（486千円/日、客単価3,740円）
- 平成23年度 「古民家スイーツ&カフェ高萩茶房」
 - ・場 所：高萩市、県指定文化財「穂積家住宅」、築約240年
 - ・期 間：平成23年10月7日～12月4日（営業日数57日）
 - ・来店者数：12,635名（222名/日、座席数約50席）
 - ・売り上げ：22,264千円（390千円/日、客単価1,762円）



里美の古民家（門前）



里美の古民家（内部）



高萩茶房（外観）



高萩茶房（内部）

業の地域活性化への大きな可能性を感じさせるものだった。

◆◆◆ 「スイーツ&カフェ」も開設、 2カ月で1万2千人

初年度の実績を踏まえ、更なる可能性を探るべく実施した2年目は、客席を50席以上確保できる十分なスペースと、門から母屋へと続く広い庭があり、敷地全体に古民家らしい趣が溢れる魅力的な物件である、常陸太田市里美地区の「荒蒔邸」

を選んだ。

また、初年度は首都圏の料理人が地方に移住・出店するモデルの構築を目的としていたが、2年目からは新しい付加価値による賑わいづくりに繋げるため、海外の舞台で活躍してきたシェフを起用した。

続く3年目は、平成23年3月の東日本大震災や福島第一原発の事故による風評被害の影響もあり、特に県北地域では、交流人口が大きく落ち込み、地域の活力低下が大きな課題となった。このため本事業によって、古民家と地域食材の魅力を活用し、多くの方々を県北地域へ呼び込み、安全で安心な県北地域の魅力を再認識してもらうことを目的に「古民家スイーツ&カフェ高萩茶房」を開設した。

舞台となった古民家は高萩市にある県指定文化財「穂積家住宅」。また、スイーツメニューのプロデュースは国内外で知名度の高い日本を代表するパティシエ、鑑塚俊彦氏に打診したところ、県北地域の活性化を応援したいとして快諾いただいた。

こうした工夫と努力を重ねた結果、2年目、3年目と来店者数は飛躍的に増加し、「高萩茶房」では2カ月間で1万2千人もの来店者を集め、地域に大きな賑わいを生むとともに、文化財活用による交流創出の新たなモデルケースとなった。さらに、本事業をきっかけに、地元高萩市など県内外の自治体や企業が古民家や文化財などを自ら積極的に活用する活性化事業の検討が各地で始まるなど、波及効果も現れてきた。

◆◆◆ 廃校を活用し、新たな挑戦

4年目の事業実施にあたっては、全国的にも問題となっている廃校施設の有効活用について新しい提案が出来ないかということから、大子町にある「旧上岡小学校」を活用したレストランとした。旧上岡小学校は明治時代に建てられ、平成13年に廃校となった木造校舎の小学校であり、廃校後は、地元の保存会の管理によりテレビや映画のロケ地として使用されていた。

また、地域食材を活用したレストランのプロデュースを人気イタリアンレストラン「ACQUA PAZZA」のオーナーシェフの日高良実氏に依頼した。

その結果、レストランの売り上げは事業実施4回のうち一番となったことに併せ、施設見学者に至っては3万人を超えるなど、大盛況のうちに事業を終えることが出来た。

これらの取り組みは、各種メディア（テレビ、ラジオ、新聞、雑誌等）にも取り上げられ、県北地域の「食」をはじめとする地域資源等の認知度向上により、県北地域への誘客や観光地への周遊など、地域の活性化につながり、また、この事業を参考にした取り組みが県内各地域において展開されるなどの波及効果が見られることから一定の役割は果たせたと考える。

今後は、これまでに得られたノウハウ等を県内各地域に積極的に提供することで、地元や民間を主体とした事業の立ち上げを促し、地域の活性化に持続的に取り組めるよう後押ししていきたいと考えている。

古民家を再生、体験宿泊などに活用 ―「普段着」の大多喜を発信―



NPO法人大多喜みらい塾塾長 ● 上治 信

「みらい塾」、テーマは故郷

千葉県大多喜町は東京から70^{キロ}圏内と比較的近くにありますが、ここ20年間、人口の自然減が毎年100名を超え、平成25年9月現在の人口は1万255人になりました。このため平成22年4月には過疎地域の指定を受けるなど過疎化と高齢化が進んでいます。

このような状況を何とかしたいとの思いから、平成24年6月に地域振興を目指して「NPO法人大多喜みらい塾」を発足させました。そして地の利を生かし、首都圏など多くの方に普段着の大多喜町に来ていただくために、「故郷」をテーマに掲げ、都市農村交流イベントや大多喜町への移住希望者に対する相談業務などを行っています。

そうした中で、運よく大多喜町の久我原地区で10年以上空き家となっていた築100年の古民家（床面積約50坪）の提供を受けられました。そこで、みらい塾では事業の大きな柱の一つとして「古民

家再生プロジェクト」を位置づけ、活動を始めました。古民家を大多喜町への移住希望者の体験宿泊などに利用することが目的です。

古民家再生、参加者の自由な発想で

この古民家再生事業は、あらかじめ決められたプログラムに沿ったものではありません。「大多喜みらい塾」が古民家再生プロジェクトに参加したい方々を公募。これに応じた参加者（ボランティア）の皆さんの主体性に基づき、自由な発想やそれぞれの想いを生かしながら事業がスタートしました。

プロジェクトの初会合は、平成24年6月9、10の両日に行われ、茨城県や千葉市、松戸市などから11名が参加しました。

この会合では、各参加者が古民家再生事業にかける想いやこの家の活用方法などを話し合い、次のようなことを決めました。

事業のコンセプトは「人のぬくもりを感じる家」

とし、具体的には

- (1) 誰もが自由に使用するために、車いす対応のトイレとお風呂を新設する。
 - (2) 食堂は畳敷きから板の間に変える。
 - (3) 客間は板の間にし、囲炉裏を設置する。
 - (4) 古民家の改修作業は、原則として毎月第1土曜日とし、年度内完成を目指す。
 - (5) 築100年の年輪の重みを大切に、極力この家にある部材の再利用を行う。
 - (6) 生活用水は井戸を使用する。（しかし、検査の結果、飲用には不適でした）
- さらに、設計士を講師に和風建築の基礎知識を学習したうえ、古民家の間取りを話し合い、平面図の作成作業を行いました。

延べ120人余りが参加、連帯感も

古民家再生の実作業は、参加者が協力して平成24年7月から今年5月まで行いました。床板の下に水がたまり、大黒柱などが腐っていたため、大掛かりな改修となりました。このため作業に当たっては専門の木工さんにご指導をいただきました。

古民家の再生作業は、昨年6月の初会合の後、原則として毎月1回、以下のような日程で行われました。

- 平成24年7月14日 畳・床板剥がし、恵比寿・大黒柱等の傾き修正、井戸掃除
- 7月28日 囲炉裏の位置決め、ビニール敷による床下湿気対策、床板張り
- 9月1日 囲炉裏づくり、床板張り



柱の修復作業が終わった古民家



完成披露会で鼓を演奏する子供たち



古民家で開かれたコンサートの様子

10月6日 床板張り
11月10日 床板張り
12月8日 設計士が手掛けた古民家見学と床板張り、風呂・トイレの屋根作り
平成25年1月12日 風呂桶設置、トイレの床張り
2月2日 お風呂場の床張り、風呂・トイレの外壁張り
3月2日 お風呂場の内外壁張り、トイレ作り
4月6日 お風呂場・トイレ作り
5月11日 お風呂場・トイレ作り
参加者は各回とも10名前後で、全体で約80名、延べ124名が古民家の再生・改修に携わりました。中には東京から足を運んだ方もいます。改修費用は約100万円かかりましたが、改修作業に携わった方々にも一部負担していただきました。作業の中で特に思い出深いことは、柱を持ち上げるために使用する「キリン」(ねじ式のジャッキ)がなかなか調達できなかったこと、柱を修正した

2週間後に客間の桁を支えている柱が折れてしまったこと、また参加者の皆さんが囲炉裏や床板張りなど随所に、実にこだわりのもって丁寧な作業をされたことです。
昨年6月から始まり、今年の5月に幕を閉じた古民家再生でしたが、共同作業を進める中で参加者同士の連帯感が生じ、今後もこうした定期的な集まりを持ちたいという声も聞かれます。
◆ ◆ ◆
古民家の改修・再生が終わった5月下旬、完成披露を行いました。
古民家に住んだ代々の皆様に対する鎮魂と新たな門出を祝うため、大鼓の演奏を奉納。大鼓は、能楽囃子大倉流の大倉正之助さんとご門弟の鼓道研究会の皆様が奉納していただきました。
また、この日は、かがり火の中、久我原地区の

◆ ◆ ◆ 宿泊やコンサートに活用

子供会が鼓の演奏を地元住民など約200名に披露しました。
さらに今年9月には、音楽を通じて社会復帰を目指している神奈川県藤沢市の障害者施設に入所している方々を招いて音楽会を開きました。音楽会では大多喜町内の老人介護施設に入所している約30名を前に歌などを披露し、楽しいひと時を過ごしました。
このほか、古民家で休みたい方や宿泊希望の皆さんに利用していただいています。

◆ ◆ ◆ 今後の方針

完成した古民家は、宿泊や食堂など「営業」としての活用は考えていません。昭和30年代にタイムスリップしたかのような静かな里山の集落の中で、ただ時間を過ごしていただく場所として、提供したいと考えています。使い方は利用者次第。自主的にコーディネートしていただきます。

このため必要最小限の設備（お風呂・トイレなど）しかありません。訪れた人が思いを伝える手段としては、ノートが一冊置いてあるだけです。しかし、ここを再生した延べ124名の方々の想いが詰まった家でもあります。
「何もしないことが最大のモチベーション」という基本的な考え方で、この家から普段着の大多喜を発信していきたいと思っています。

都市住民に新たなライフスタイルを提案 ―「古民家付き農園C o r o t」―



株式会社C o r o t 代表取締役社長

● 峯岸祐高

◆◆◆ 祖父母の家を受け継ぎ、農業研修

7、8年前に祖父母が他界して私の母を含め3姉妹が、埼玉県所沢市にある築約100年の古民家（建て坪約80坪）と畑5反（約50アール）、森林、竹林を相続した。

3姉妹はいずれも公務員か主婦で農家を継続するのは困難なため、「マンションにしてしまおうか」など色々な話があった。しかし、皆の生家であり、私の祖母の家だ。無くなるのは皆寂しい。そこで祖母の家を残しながら事業を興す方法はないかと考えた。

畑もあったのだが、何もわからないので、まず農業研修に出た。そこは所沢の中でも大変大きな農家で、私たちの畑の10倍以上の面積を機械で耕し、たくさんの人が働いていた。

そんな農園で研修をして3日目。本当に農家は大変だ。小さいころから野球をやっていたので少しは体力が続くかと思ったが無理だった。自然に

近い仕事がいかに大変か、また自分がいかに何も知らなかったか、何もかもが予想とは違いすぎる現実を突きつけられた。

◆◆◆ 挫折から発想の転換

生産農家はあっさり諦めた。しかし、農業研修の中でとても楽しかったことがある。野菜の収穫やその後のごはん、家族の関わりなど農家ならではの自然と調和し、和を重んじる生活に心惹かれた。またその中で、農家の「場」としての価値も感じた。冠婚葬祭をはじめ様々な行事で人を受け入れ、開かれた「場」としての魅力がそこにあった。学生時代から10年近く東京で暮らし、働いていた私には余計にそう映ったのかもしれない。

そこでたどり着いた考えは「野菜を生産することは出来ないが、農家の文化や生活を体験する「場」を提供することなら出来るのではないか。私には知識はないがお客様

さまと一緒に生活を楽しむことなら出来るのではないか」ということだった。先人たちからは笑われるかもしれないが、先人の日常が現在の非日常であり、現代人にとっては楽しみにさえなる。そんなきっかけから「農家の可能性は生産だけでなく、現代人にライフスタイルの提案まで出来るのではないか」という思いで、平成22年、古民家付き農園C o r o tを始めた。

◆◆◆ 古民家付き農園C o r o tとは

古民家付き農園C o r o tでは祖父母から相続した古民家や農園を生かして、次のような4つの事業を行っている。

（1）貸し農園

こちらは会員制となっており、地域の方や都内在住、また企業の方々など幅広い利用者がいるのが特徴。また農機具や古民家などの休憩スペースがあるためビギナーの方の利用が多い。貸し農園も基本的に農園だけというよりは生活を楽しんでいただく。収穫した野菜で囲炉裏を使い、鍋を囲



古民家の内部。囲炉裏が見える



corotでのイベントの様子



古民家ではヨガ教室も開かれている

む。またバーベキューもする。栽培した大豆で味噌を作るなど畑を生活の一部として捉えている。畑作業をしてそのまま宿泊されるお客さまも多い。

こうした貸農園は現在、約20組のお客さまに利用していただいている。

(2) 昼間の体験利用

こちらは団体が多い。ピザ作り、バーベキューや流しそうめん、収穫体験などをする。またNPOなどの会議や結婚パーティーにも利用されている。

(3) 宿泊体験

昼間と合わせて利用する方も多い。畑で収穫体験をし、かまどでご飯を炊き、囲炉裏で鍋をつつき、五右衛門風呂で温まり、大広間の柔らかな畳で就寝する。半分以上は都内のお客さま。最近

埼玉、神奈川のお客さまも多くなってきた。地域のお泊り保育や父母会、自治会のイベントなどの利用も。

(4) ワークショップ

平日の昼間に行われている。ヨガ教室、野菜の料理教室や昔話読み聞かせ、ベビーヨガ、ベビーマッサージ、フラワー教室など。お客さまは地域の方々。その他不定期でライブ、イベント等も行っている。

◆ ◆ ◆ 昔ながらのライフスタイルを残す

「古民家付き農園」の活用目的は幾つかある。

第1は昔ながらのライフスタイルをリアルに残すこと。教科書や博物館でなく体験できることが大切だと考える。囲炉裏のありがたさは冬に火をおこしてみないとわからない。日向ぼつこの気持ちよさ、縁側での昼寝等、実際にやってみると本当の価値がわかる。

第2は新しい農家の利用

方法の提案である。生産だけが農家ではない。地域や

歴史に根ざした農家自身の生活スタイルそのものに価値があることを提案したい。

最後に地域に開かれた「場」としての可能性を追求すること。農家は昔、冠婚葬祭をはじめ「場」として活用されていた。現代の感性でアレンジし、ワークショップ、イベントやライブ等を通じて現代の開かれた「場」としての可能性を追求したい。やはり昔を重んじるだけでは時代にマッチしない。先人に学びつつ、今を楽しみたい。

◆ ◆ ◆ 地域に喜ばれる運営を

「古民家付き農園」事業の最大の成果は、地域の方々に喜んでいただけたことだと思う。「あなたのおかげでここに住んでいることが楽しくなったよ」という有難い言葉を聞くこともある。また農園の利用がきっかけとなり、「農的暮らし」を始めるため都内から地方に引っ越すお客さまも増えてきている。

corotは私をはじめ若いスタッフが中心で、経験不足でもある。それを補完するのは地域の先輩との繋がり。事業開始から3年以上が経ち、こうした先輩との距離が少しずつ近くなっているが、さらに関係を大切にし、先人に学び続けたい。

またcorotはスタッフ、お客さまという垣根をこえてcorotが好きの人が集う場所になってきている。その中で様々な新しい企画の種が生まれつつある。この種を実らせるのも今後の課題だと思う。今後も住宅街にある都市近郊の施設として地域と共生しながら古民家付き農園を運営していきたいと考えている。

歴史的建造物を生かしたまちづくり —「うだつの上がる町並み」を観光資源に—

岐阜県美濃市建設部都市整備課 ● 早戸智也

歴史と文化の薫り高い都市

美濃市は、岐阜県のほぼ中央に位置する人口約2万3000人の都市で、総面積は117・05平方キ。濃尾平野の最北端に位置し、地域の約8割を山林が占め、市の中央部には清流長良川が流れる自然豊かで風光明媚なまちである。また、1300年の歴史と伝統を誇る「美濃和紙」の産地として、あるいは江戸時代以降に築かれた商家群が「うだつの上がる町並み」として知られる歴史と文化の香り高いまちでもある。

中心市街地に残るうだつの上がる町並みは、16世紀後半に越前大野や飛騨高山の城主であった金森長近が、関ヶ原の戦いの軍功で加封された上有知（こうづち、現在の美濃市一带）に築いた城下町であり、金森家没落後も長近が開いた上有知湊により、長良川の舟運を活かした物資の集散地として近代まで繁栄を続けた商家町である。

この町並みの象徴でもある「うだつ」とは元来、

火災時の類焼を防ぐため隣家との間に設けられた防火壁のことを言い、当初は小屋根を付した簡単な構造のものであったが時代と共に豪華で立派なものへと変貌し、富の象徴として設けられるようになったことから、『うだつが上がらない』の語源になったとも言われている。

このうだつを上げる古民家などの家屋が、美濃の町並みには現在も19棟（江戸時代中期から明治時代に建築）あり、うだつ以外にも様々な形態や意匠を凝らした建物が数多く残っていることから、全国的に見ても特徴的な町並みであるとして、平成11年5月に重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。

「うだつの上がる町並み」を再生

しかし昭和50年代半ばまでは、町並みがつ魅力や歴史的な価値は、住民をはじめ広く一般には理解されておらず、文化財としての認識はあったものの、その保存や活用について特段の動きは見

られなかった。

町並みの中には、地区を分断する都市計画道路が計画され、町並みを構成する歴史的な建造物等も老朽化が進み、電柱や広告物等の乱立とあわせ町並み景観は著しく損なわれていた。また、市街地と近隣都市を結んでいた私鉄の廃線表明や高齢化等による商店街の衰退などで、町並みの活力は確実に奪われていた。

こうした中、市ではうだつの上がる町並みを美濃市の「顔」と捉え、これを再生するための基本方針として「市街地整備マスタープラン」を平成8年に策定し、都市計画道路の見直しや伝統的建造物群保存地区の指定、電線類の地中化や道路修景などに取り組んできた。

これら各事業の実施にあたっては、国土交通省所管の「まちづくり総合支援事業」を活用し、電線類地中化などの道路整備にあわせ、ポケットパークやサイン整備などの景観整備を一体的に進めてきた。また、まちづくり総合支援事業による整備が終

ると、次は「まちづくり交付金事業」により、

町並みを取り巻く環境整備として観光駐車場や観光交流センターなどの整備を



電線類地中化などの基盤整備が行われた町並みは多くの観光客で賑わっている

進めてきた。

こうして、2つの制度を活用しながら様々な事業を計画的に実施してきたことで、わずか10年ほどの期間で町並みの整備をほぼ終えることができた。その結果、衰退の危機にあったうだつの上にある町並みは見事、美濃市の顔として全国的に広く知られる町並みへと生まれ変わったのである。

町並みの半分を外観整備

行政による町並み整備が進む一方、住民も文化庁の補助制度を活用し、伝統的な建造物等の修理・修景に取り組んできた。

当初は個人の財産である家屋に対して規制や制限が課せられることに難色を示す声も聞かれたが、地元有志らが組織する町並み保存会などの献身的な活動や、見違えるように整備されていく町並みを前に、いつからか町並みをもつ歴史的・景観的な価値を守ろうとする機運が高まり、地域住民が一体となった取り組みへと広がっていった。

美濃の町並みには、歴史的に価値の高い伝統的建造物など約200棟の主屋（しゅおく）があるが、平成24年度末までに、約100件の外観修景が行われてきた。伝建地区の指定からわずかな期間で、これだけの修景整備が進んだことは、住民の中に『町並みは公共のもの』という考え方が浸透してきた結果であろうと推測できる。

ギャラリーや飲食店など多様な活用

町並みの中で歴史的な建造物が果たす役割は、



毎年春に開催される「うだつの町家のおひな様」。軒先には雛人形が展示される

町並みを美しく魅せるということだけではなく、観光資源として地域を活性化させるといふ部分もある。

本市では前述のとおり、住民が積極的に歴史的建造物等の修理・修景に取り組んできたことでその保存と活用が図られてきたが、その活用パターンは様々である。

主なものを紹介すれば、1つ目は、伝建地区の修理・修景基準に基づき外観の整備を行ったもので、原則として建物の外観のみを公開しているものである。町並みを美しく魅せるための最も基本的な保存と活用の姿である。

2つ目は、通りに面した古民家の軒先や居室等をギャラリー的なスペースとして改修し、広く一般に開放しているものである。外観修景にあわせて改修したり、既存空間をそのまま活用したりしている。写真や絵画などの展示に用いたり、町並みイベントとして行われる雛人形展などで用いたり、町並みに賑わいを生み、観光客が訪れる魅力の一つとして活用されている。



喫茶店として活用されている町家。屋根の両側には「うだつ」が上がっている

3つ目は、飲食店や土産物販売など新たな商いをするために建物全体を整備しているもので、建物内部は往時の姿で復元したり現代風にアレンジしたり様々である。古民家など一般住宅のほか、空き家や空き店舗を活用する場合もあり、地域の空洞化対策にも貢献している。最近では、商いのほか大学生のイベントスペースとして活用されるものもあり、いずれも町並みの活性化に大きく貢献している。

市民と行政、一丸でまちづくり

これら活用の基本となっているのは、住民が町並みに誇りと愛着を持って取り組んでいるということであり、その背景には住民と行政が一体となつて進めてきた町並み整備があると思われる。うだつの上がる町並みがより一層輝き続けられるよう、今後も市民と行政が一丸となつてまちづくりに取り組んでいければと願っている。

古民家でよみがえる宿場町

―交流と移住を進める熊川宿の取り組み―



福井県若狭町歴史文化課主査・学芸員

● 岡本潔和

歴史と自然に恵まれた若狭町

若狭町は、福井県南西部の若狭地方のほぼ中央に位置する人口約1万6千人の町です。北は日本海、南は滋賀県に面しています。町内には熊川宿をはじめ、縄文時代の鳥浜貝塚、若狭の首長墓といわれる古墳群、ラムサール条約に登録された三方五湖、名水百選の瓜割の滝などがあり、数多くの歴史遺産と自然遺産に恵まれた町です。最近では三方五湖のひとつ水月湖の湖底堆積物である年縞（ねんこう）が、地質学年代の世界標準となつて注目されています。

鯖街道と熊川宿

小浜から京都をむすぶ若狭街道は、古くから日本海の水産物を都に運ぶ役割を果たしていました。中でも「鯖」が京都の人々にとって大衆魚として人気が高かったことから、戦後、この街道が

「鯖街道」と呼ばれるようになったといわれています。

熊川は、もとは40戸ほどの小さな寒村でしたが、天正17年（1589年）小浜城主浅野長政が、軍事上、交通上、重要な場所であるとして、諸役免除の布告を発したことににより、200戸を超える宿場町へと発展することになりました。

町並み保存からまちづくりへ

大正時代に国鉄小浜線が開通して、物流拠点としての役割を終えた熊川でしたが、昭和50年、福井大学の福井宇洋先生によって町並みの価値が見出されます。その後、福井大学による伝統的建造物群保存対策調査などを経て、平成8年に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。山並みを背景に幅広い街道にそってさわやかに水音をたてて流れる前川と、平入りと妻入りの建物が混在し変化に富んだ家並みが評価されたのです。

平成7年に「若狭熊川宿まちづくり特別委員会」

（熊川の住民で構成）が発足すると、まちづくりの活動が大きく進展します。

河合健一会長は、いわゆる観光地化ではなく、ここに

住民が暮らし続けるためのまちづくりを行っていることを目標に掲げました。重要伝統的建造物群保存地区の選定後は、この目標を見据えながら、住民と行政が一体となって着実に事業を展開してきました。美化活動、広報誌の発行、工芸品の開発、語り部の養成、フォーラムの開催などその活動は多彩です。

平成10年には、京都から伝わった「てっせん踊り」を80年ぶりに復活させ「熊川宿伝統芸能保存会」が発足しました。平成14年には、白石神社の山車と見送り幕を40年ぶりに復元させました。民家の修理事業が始まると技術者が集まり「熊川宿町並み保存伝統技術研究会」が発足しました。平成12年から始まった秋の観光イベント「熊川いっぽく時代村」は、若手を中心とした実行委員会が盛り上げています。

一方、様々なハード事業も実施されました。民家の修理事業はこれまでに約90棟が完了しました。資料館、旧逸見勘兵衛家の整備、道の駅「若狭熊



古民家の保存修理の様子



「おもてなしの会」のメンバーら。後ろが旧逸見勘兵衛家



移住希望者らへの空き家の紹介

川宿」の整備、中ノ町の景観整備（電線の地中化、前川の石積み護岸、地道風舗装等）、下ノ町と上ノ町の景観整備（電柱のセツトバック、前川の石積み護岸、地道風舗装等）、熊川番所の復原整備、観光駐車場とバス停留所の整備などが行われました。

再生した古民家を喫茶スペースに

築約150年の旧逸見勘兵衛家は、熊川宿の中心部、街道を横切る河内川の橋のたもとにあります。逸見勘兵衛は問屋や造り酒屋を営み、村長を務めた人物です。やがて由緒あるこの家が空き家になり、平成5年の冬には、とうとう外壁に大きな穴が開き、取り壊しの危機を迎えました。

そこで町が所有者から寄付を受け修理することになりました。修理の設計は全国各地で民家再生

に取り組まれている建築家吉田桂二先生にお願いしました。また東京大学の西村幸夫先生のアイデアにより、伝統的建造物群保存地区に暮らすためのモデルハウスとして改修されることになりました。

平成18年、自分たちの手で観光客の休憩所をつくりたいというある主婦のひと言が逸見家を新たな活用に導くことになりました。これに賛同した有志が集まり、翌年、自立したまちづくり型経済活動と来訪者との交流をめざす「熊川宿おもてなしの会」が民間の有志により設立されました。

以来、土日と祝日のみ旧逸見家の土間部分を喫茶スペースとして利用し、特産の葛を使った葛ようかんを看板メニューとして営業しています。葛ようかんは、京都からUターンされた元和菓子職人の発案による一品です。また平成21年5月から宿泊施設としての活用も始めました。食事は熊

空き家への移住を進める

川で取れた米や新鮮な野菜を用いた田舎料理です。木工、陶芸などの体験メニューも豊富にそろえ、好評をいただいています。

熊川宿では少子高齢化が進み、年々古い民家などを中心に空き家が増加し、そ

の対策が急務となっています。平成22年の調査では40件の空き家があることがわかり、まちづくり委員会は町と協働で対策に乗り出すことになりました。

平成23年から2年にわたり、立命館大学政策科学部の高村学人教授と学生が加わり、移住者受け入れのしくみの提案や所有者の意識調査などを行っていただきました。平成24年にはまちづくり委員会に空き家対策部会が設置され、「熊川宿の空き家を活かした移住推進事業」として、先進地視察（奈良県橿原市今井町）、ワークショップとフォーラムの開催、移住希望者向けのパンフレット「熊川宿暮らしのガイド」の作成、そして、実際に空き家を紹介する「熊川宿住まい探しまち歩き」を実施しました。

これらの事業を通して、移住を希望される方は、熊川での暮らしに少なからず不安を持つており、その不安を取り除くためには、伝統的建造物群保存制度（伝建制度）などの情報提供、移住前後のサポート体制などが必要であることがわかりました。

伝建地区を未来につなぐ

伝建地区では、住民が快適に暮らしていけるか、まちづくりの中で古民家を活かすことができるか、住民が町に誇りを持てるかが、その将来を決めると考えます。これからは伝建地区熊川宿を未来につないでいくために、行政として何ができるかを自分自身に問いかけながらまちづくりのお手伝いをしていきたいと思っています。

貴重な京町家を再生、現代に生かす

—居住者の思いを原点に—

特定非営利活動法人京町家再生研究会 事務局長

● 丹羽結花

町会所の再生事例

平成22年秋、京都市街地三条通に面した町会所（町家）が再生された。町内の寄り合い、なかでも地蔵盆には欠かせない場所である。

その数年前に借り主が亡くなり、町内に託され、「きちんと改修して人が行き交う場所にしたい」という相談が京町家再生研究会に持ち込まれたのが事の発端だった。

しかし、町内の予算は潤沢ではない。そこにアメリカにあるワールドモニュメント財団から「ドナー（資金提供者）の考えに合えば資金が出るかもしれない」という話が来た。平成20年にニューヨークで行われたシンポジウムに京町家再生研究会が参加した際、つながりのできた財団である。幸運にもドナーによる資金提供が実現し、町会所の再生プロジェクトが大きく動き出すことになったのだった。

このプロジェクトでは、町内の人々も一緒に、

設計士の描いた図面を囲み、議論しながら、ふさわしい改修を検討した。平成22年6月に始まった実際の改修工事では、大学生や専門家を招いて見学会を行い、伝統工法にしっかりとふれてもらう機会を提供した。また子供たちを対象としたワークショップも実施し、土壁塗りを経験するなど次世代の教育の役割も果たした。

当初はそれほど関心を持たれなかった地域住民もいたが、こうした改修の過程が目の前で繰り広げられるうちに少しずつ意識が変化していった。改修工事が完成した後は「せっかくなきれいな町家になったのだから」という気持ちが高まり、祇園祭には屏風を出して飾ったり、お茶のお稽古を行ったり、ついには京町家再生研究会の創立20周年記念事業大茶会の茶席の一つとして、50代〜60代のおじさまたちが亭主（茶会で茶事を主催する人）としてデビューすることになった。

現在、この町家は再生研究会の関連組織の本部としても機能しており、同研究会の打ち合わせや京町家の所有者などとの相談に応じる場所となっ

ている。言わば地域と会が連携を深める場所として機能している。

京町家再生の成功事例の一つとして、これほどお手本になるようなすてきな話はない。だが、最初からこのような結果をもとめてプロジェクトが動き始めたわけではない。ワールドモニュメント財団のようなファンドと対象町家の出会いは「タイミングの問題」であり、資金の提供者も当初はこのような展開になるとは思っていなかったようだ。また、地域住民の意識の変化も意図したものではない。

最初の相談が当研究会に持ち込まれてから2年以上経過して、ようやく町家再生プロジェクトが実現しており、そこまでたどり着くまでには様々な議論、軋轢（あつれき）やあきらめもあった。むしろ再生へ至るプロセスそのものが、町家の魅力を再確認し、自分たちの未来を見据える道筋となっている。町家再生はゴールではなく、そこから新たなスタートが始まるのである。

町家存続に危機感、再生研究会が発足

平成4年に京町家再生研究会が発足して20年が過ぎ、研究会が手掛けた再生事例の中には注目を浴びたものも多い。

会が発足した当時は大型町家や路地家屋の一群が、マンション建設用地とみなされるような時代であった。由緒ある立派な商家も取り壊される。普通に暮らしながら、相続や周辺環境の悪化に悩む住民もいる。このような状況に危機感を覚えた有志が集まり、「ひとつでも多く町家を残したい」



町会所の改修工事の現場見学会

京町家再生研究会創立20周年記念事業の様子。
再生された町会所の2階で

京町家再生研究会の例会の様様

「京都で暮らすならば町家」という選択肢が普通にあるような時代、自分の「かさ」にあった町家に住み、そして住み替えることができるような時代がやってくるように、今日も議論を繰り返して、悩みながら、私たちは町家と向き合っている。

「京都で暮らすならば町家」という選択肢が普通にあるような時代、自分の「かさ」にあった町家に住み、そして住み替えることができるような時代がやってくるように、今日も議論を繰り返して、悩みながら、私たちは町家と向き合っている。

という思いからこの会は発足した。
初代会長に就任した望月秀祐氏は京都市都市計画局長を務めた経験もあり、自らのネットワークを活用して、設計、施工などの建築関係者、大学の研究者だけではなく、税務や財務の専門家にも声をかけ、持ち込まれた問題を解決するためにさまざまな方面に支援を求めた。物的、資金的支援ではなく、知的な助言や技術的な協力である。
研究会という名称にも具体的な町家再生を実現するために必要なことを一つずつ行っていくという意思が表れている。さまざまな立場の専門家が知恵を出し合い、図面を囲んで議論し、最適な方法を検討するというやり方は当初からのものだ。このようなプロセスと意識の変化にこそ町家再生の意義があるといえよう。単なる老朽家屋と思われていたものが、元々の価値を見いだされ、現代における新しい魅力を発揮していく。これらのバ

ランスがよいとき、再生された町家は美しく、現代に再び生きていく力を得る。

町家を現代に生かす形を模索

このようなプロセスを経て生まれた初期の再生事例は現代的なデザインがふんだんに盛り込まれ、当時としては珍しいものだった。ある再生事例では、2階の明るいガラス窓、漆喰壁の明るい室内に並ぶ椅子やテーブルが町家のイメージを大きく変えた。表屋のテナントも従来の呉服関係ではなく、若者向きのケーキとパスタの店舗が入り、若い職人さんたちの姿が表通りから見える。

ところが「おしゃれな再生」として認知されるようになると、似たような改修が次々と現れた。今では町家レストランやカフェが当たり前になっていくが、それらの多くは活用が目的であるようだ。

本来の町家再生とは、その町家や家族にふさわしい、現代に生きる形を模索した結果なのである。前述の初期の再生事例も相談から完成まで3年かかった。しかもその後も家族の事情や商売の関係から、改築が繰り返され、使用方法はその都度見直された。再生し続けているのである。経済優先の安易な改修が増え、本来の意義が見過ごされ、表面的なブームになってしまったのは、大変残念なことであり、近年は、生活の場としての町家の価値観が薄れてしまったという危機感を強く感じている。

居住者の思い大切に

今、この町家に必要なことは何か、実態を知り、一つでも町家を残すための手だてを探る。こういう地道な積み重ねが活動の基本である。個別の事情を抱えた町家を一括してなおすことはできない。同じパターンで効率的に再生していくこともできない。

万能薬や天才的な医者はいらない。原点である居住者の思い、そこにある町家の存続を第一と考えることが必要なのである。

「京都で暮らすならば町家」という選択肢が普通にあるような時代、自分の「かさ」にあった町家に住み、そして住み替えることができるような時代がやってくるように、今日も議論を繰り返して、悩みながら、私たちは町家と向き合っている。

歴史的建物をレストランや交流の場に ―篠山市福住、住民主導で空き家活用―



篠山市教育委員会社会教育・文化財課課長補佐

・村上由樹

福住の概要

兵庫県篠山市福住の町並みは、人口約4万4000人の同市の東端に位置し、篠山盆地を東西に横切るかつての西京街道（京街道）と粕井川が平行して走るようになるあたりから広がる。その周囲は緑豊かな丹波の山々がとり囲み、四季折々の表情を見せる。

街道沿いには、一里塚や道標、常夜灯籠などの歴史的環境を形成する工作物等が点在するほか、粕井川の水害対策のための石積みの上にたつ土堀と土蔵の連続が、背後の農地や山並みと調和している。また、住吉神社の祭礼やキツネカエリなどの民俗芸能や年中行事が、地域住民により大切に継承されている。

貴重な歴史的町並み、 重伝建地区に選定

江戸時代、篠山藩は「福住村」を宿駅に指定し

繁栄する。福住は、京、大坂との交通の要衝であり、宿場としての機能を持ったわけだが、街道に沿って東（京方面）には農村集落が連なる町並みを形成しており、宿場町と農村集落の2つの歴史的景観が一つの街道に沿って連続する、全国的にも非常に貴重な町並みが残る。

明治維新に伴う宿駅制度の廃止により、旅籠や商店は徐々に廃業し、それ以降、福住の経済は沈滞することとなる。しかし、そのことが近代化の影響をうけず歴史的な町並みを残す要因となっている。

平成17年ごろから、地域の資産の活用をテーマに住民対象のワークショップが数度にわたり開催されたが、この中で、「福住の歴史的な町並みは住民にとって大切な資産であり、今後のまちづくりの起点とすべきだ」との意見が多く出された。

また篠山市教育委員会が平成19年から2年間かけて実施した「福住地区伝統的建造物群保存対策調査」により、福住の町並みの歴史と特質が明らかになり、この結果を受けて、住民の認識はさらに

深まった。

こうして平成24年12月、福住から西野々にわたる西京街道に沿った約3・2^キのエリアが国の重要伝統的建造物群保存地区として選定された。

歴史的建物を活用、 イタリアンレストランも

この保存地区選定に先駆け、平成22年からは歴史的建造物の空き家活用がスタートした。

第1弾となったのは明治時代の初めに建てられた古民家。もともと産婆業が営まれていた空き家を住民が中心となり、利用計画を立てて改修した。現在、「さんば家ひぐち」として地域のイベントや行事等に活用されている。歴史的な建物の活用にあたり、他の候補（鉄筋コンクリート建て）があったにもかかわらず、空き家を選んだことが、その後の福住の歴史的建造物の活用に弾みをつけることになった。

平成24年には、2件目の古民家の改修が行われた。改修は店内の内装を中心に行い、現在、イタリアンレストランとして営業している。建物の所有者と利用者双方の考えを中間支援団体が整理し、資金の問題から改修の内容などの調整を行う。いわゆるサブリースという事業スキームで、建造物の再活用を行うものである（関連図参照）。

また、平成25年3月には、かつて銀行や郵便局として利用された歴史的建造物を改修し、お試し住宅「わだ家」と銘打って、田舎暮らしの希望者を対象に、1カ月単位で賃貸事業を行っている。1階と2階をシェアして2世帯が同時に使用可能で、共用スペースには地域住民との交流を目的にピザ

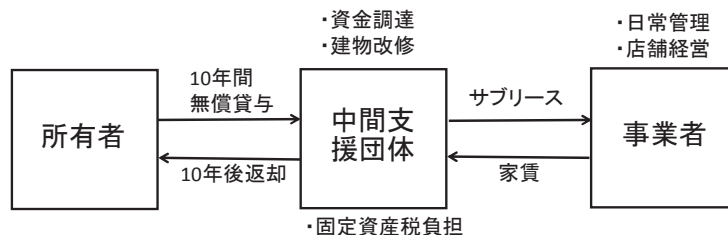


古民家を改修したイタリアンレストランの内部。
まちづくりについて話し合う住民ら



7月末に行われる住吉神社の水無月祭

サブリースの仕組み



釜やバーベキュースペース等も設けられている。これら3件の歴史的建造物の活用事例は、県や市の空き家活用事業等の補助金を利用した。個人の資金で工房、簡易宿泊所、飲食店を開業するなど、補助金を受けない空き家への移住も含めると他に8件の活用事例がある。また、これらの事例は必ずしも保存地区内だけではなく、その周辺部で行われているケースもあり、地域全体でこうした取り組みが進

んでいる。

◆ ◆ ◆
他地域に刺激受け、
住民の取り組みが実る

篠山市福住で古民家など歴史的建造物の活用が進んでいる背景には次のような事情がある。

平成16年、市内では初めて篠山の城下町が重要伝統的建造物群保存地区に選定され、平成20年度から22年度にかけて、「篠山市歴史文化基本構想」が策定された。

この基本構想では、市域全体で歴史文化を活かしたまちづくりを行う方向性を示し、各地域で活発に歴史的資産の見直しが行われ、住民主体でその活用が図られるようになった。そうした中、市内の民間団体が事業主体となり、平成21年から積極的に市内の歴史的建造物の活用や再生の中間支援を行う取り組みを開始した。サブリースなどさまざまな事業スキームを

業スキームを駆使し、次々と活用と再生事業を実現していったのである。こうした事業によって変わりゆく町並みを目の当たりにした福住の人々は、空き家活用のイメージを描く

ことができ、空き家となった歴史的建造物の所有者に活用のメリットを説くことで複数の歴史的建造物の活用への協力をとりつける。中間支援団体、NPO、そして行政と密接に連携をとり、利活用について協議を行いながら使用されていない歴史的建造物の活用を具体化していった。福住で歴史的な建物の活用が急速に進んでいるのは、そうしたひたむきな住民の取り組みが実った結果といえる。

福住の今後

文化財や伝建地区に関し「保存」と「活用」の両面から様々な考え方があふれている。しかし、まず文化財や建造物等の保存の措置をとり、活用へと結び付けていくのがいわば筋道であろう。しかし、福住の場合、これが逆転してしまった。保存地区選定に先行して住民主導で歴史的建造物の利活用がスタートし、今後もしばらくこうした状況は続くと思われる。

一方、最近では福住の町並みを見学に来る人が増えつつあることから、住民約30名が名乗りを上げ、福住の案内人となるため研鑽を積むなど、地域が一体となり歴史的な文化と町並みを活かしたまちづくりが進みつつある。

今年度から開始されている保存修理事業の中の一つに、旅籠の様式がそのまま残る空き家がある。その家で生まれ育った所有者はUターンして建物の特徴を活かし、開業することに思いをめぐらしているという。また一つ眠っていた福住の建物に明かりが灯る。期待に胸をふくらまして待っているのは私だけではないはずである。

「地域の宝」の継承に向けて —暮らしのある世界遺産・石見銀山—



大田市教育委員会教育部石見銀山課 副主任技師

● 小野将史

大田市は、島根県のほぼ中央に位置し、北に日本海、南に中国山地を擁する人口約3万8000人の都市である。大田市は世界遺産である石見銀山遺跡があることで知られ、今年は出雲大社の遷宮もあるなど多くの観光客で賑わっている。ここでは、世界遺産の構成資産でもある町並み保存地区において取り組んでいる地域の固有性を生かしたまちづくりについて紹介したい。

暮らしのある世界遺産

石見銀山は、銀を通じて世界的に重要な経済・文化交流を生み出し、銀の生産から搬出に至る銀山運営の全体像を明確に示す遺跡として、平成19年7月に世界遺産へ登録された。世界遺産は、国史跡や重要文化財等からなる14の資産がコアゾーン（約529ヘクタール）を構成し、その周囲に緩衝地帯を設けて包括的な保全を図っている。

コアゾーンには2つの町並み保存地区があり、「大森銀山地区」は昭和62年に鉱山町として、「温

泉津地区」は平成16年に港町・温泉町として、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。両保存地区は、ともに高齢化の進む人口400人前後の町であるが、本物の残る町並みの中で人々の暮らしが営まれる「生きた文化財」として、先人から受け継いだ豊富な財産を良好に維持しており、さらに磨きをかけることで、価値の共有とその持続的な継承に取り組んでいる。特に選定から25年を経過した大森銀山地区では、まちづくりの成熟にあわせて示唆に富む取り組みがみられる。

地域の誇りとしての文化財保存

大森銀山地区の住民による文化財の保全活動は、大田市への合併を契機として昭和32年に町内全戸加入で結成された「大森町文化財保存会」に始まる。

昭和45年には「石見銀山遺跡愛護少年団」も結成され、住民たちが協力して清掃活動を行うなど遺跡の保護と自然環境の保全に取り組んでおり、

かつて政治・経済の中心地であった大森町の歴史と文化を「地域の誇り」として将来世代へ引き継ぐとする主体的な意識が高い。

町並みを歩けば、軒先を季節感のある一輪指しや小物で飾り、室外機や電気配線等を竹や木枠で囲むなど、町並み景観への調和を図る細やかな配慮が見られ、来訪者をもてなす住民たちの心遣いが住民意識（マナー）として醸成されており、世界遺産登録にあたって住民たちが定めた次のような住民憲章にその姿勢がよく表われている。

「石見銀山 大森町住民憲章」

このまちには暮らしがあります。

私たちの暮らしがあるからこそ世界に誇れる良いまちなのです。

私たちはこのまちで暮らしながら人との絆と石見銀山を未来に引き継ぎます。

未来に向かって私たちは

- 一、歴史と遺跡、そして自然を守ります。
- 一、安心して暮らせる住みよい町にします。
- 一、おだやかさと賑わいを両立させます。



大田市大森銀山伝統的建造物群保存地区



地域住民による町並みの清掃活動（大森銀山地区）



大森銀山地区の古民家を活用したカフェ

伝統的建造物の保存と活用

大森銀山地区では、昭和62年の選定以降、継続的に保存事業を実施しており、現在では伝統的建造物の半数以上が保存修理を完了し、あわせて店舗や公開施設としての活用が図られている。

旧大森区裁判所は町並み交流センターとして、大森代官所跡に建つ旧廻摩郡役所は石見銀山資料館として活用されているほか、市に寄贈を受けた武家屋敷や港湾集落にある古民家は修理を行って指定管理者制度の導入や民間への貸し出し、地域住民による管理運営によってガイダンス施設や飲食店として利用され、地元雇用を生み出している。

また、町並みではカフェや雑貨、飲食店など、地域固有の文化が醸し出す空間を生かしたこだわりの店舗が来訪者を迎えており、空き家となった伝

統的建造物を修理して社員の住まいとして活用する地元企業の取り組みもあるなど、高齢化の進む山間の小さな町にも若者や家族の定住が進み、地域の担い手の育成と町の活気につながっている。

また、温泉津地区においても温泉旅館が一軒貸しの宿の提供を始めるなど、地域の特性に合わせた伝統的建造物の利活用が進んでいる。

文化財で茶会、教育にも活用

藩政期に町年寄や代官所の御用達を務めるなど、石見銀山御料内で最も有力な商人の住宅であった熊谷家住宅（重文）は、平成13年からの保存修理工事にあたって、当初から「生かして使う」ことを目的とした取り組みを進めた施設であり、平成23年度からは指定管理者制度を導入して民間団体による積極的な管理運営が行われている。

指定管理者である「家の女たち」は、修理工事に際して家財整理

のためのパート職員として集まった7名の地元の女性からスタートした団体である。女性たちは作業を通して家財に関する知識や住宅への愛着を深め、今では一般公開の管理と館内ガイドを務め、季節に合わせたし

つらえ替えや生活感のある展示を工夫して好評を得ており、さらに「雑ものの茶会」や「かまどの日」などといった行事を催すことで、伝統的な日本人の暮らしを来館者に伝えている。

また、市では地域に残る生活道具や昔の暮らしを学ぶために、市内の小中学生を対象とした「昔のくらし体験学習」や石見銀山学習を行っている。

熊谷家住宅では、かまどを使ったごはん炊きや家財道具を用いた体験を通して、地域の宝と暮らしを大切にすることを育て、伝統的建造物の保存修理では、土壁塗りの体験を通して、文化財に触れ親しむ中から地域の歴史と文化を引き継いでいく担い手の育成を図っている。

また、観光客などには石見銀山ガイドの会による遺跡の案内や世界遺産センターにおけるガイダンスを実施しており、多様な形で地域の宝を生かした学習機会を提供している。

地域の宝の継承にむけて

以上のように、石見銀山では遺跡の中にある暮らしを大切にしながら個性を魅力として発信するまちづくりが展開されている。石見銀山は暮らしのある世界遺産として、住民と行政が協働しながら自らの手の届く範囲で地道に成長を重ねており、地域固有の環境やコミュニティを大切に、特性を生かした伝統的建造物の活用を進める魅力的な舞台として、これからもその価値を将来へ良好に伝えていきたい。

女性の視点で古民家の魅力を発信

―山口市への移住もサポート―



一般社団法人おんなたちの古民家代表理事 ● 松浦奈津子

「おんなたちの古民家」誕生

私が「一般社団法人おんなたちの古民家」を設立するきっかけになったのは、「古民家鑑定士」という資格に出会ったことだった。「面白そう！受けてみたい」と直感的に思った。

20代のころ、地域情報誌の記者として山口という街を色んな角度から取材してきた経験が今に生きている。行政関係者や中小企業の経営者をはじめ、イベントや祭りの運営者、市民活動やボランティアに関わる人たちと一緒に「山口」について真剣に語るうちに、自分の住むこの街のことを心から誇りに思うようになっていった。

29歳で結婚退職後、2010年12月に古民家鑑定士の資格を取得。調べてみると、全国の都道府県には、〇〇県古民家再生協会という団体があったが、その当時、山口にはなかったため、「やるなら一番目！」と決意。全国の協会の代表者は男性ばかりで、女性は初めてだったため、名前もわ

がままを言って「(社) おんなたちの古民家」にさせてもらい、2011年3月に法人を設立した。

しかし、古民家を再生するにしても、建築の経験が全くない。今思えば無謀な挑戦だったが、起業したいという思いが強かった私は、「何とかするだろう」という根拠のない自信といつもの勢いだけで立ち上げてしまったのだった。

古民家の魅力を発信、定住サポーターにも就任

法人設立後、「まず、自分にできることは何か？」と考えたが、その答えは一つだけだった。

それは、20代で私がやってきたこと。そう、取材活動だ。建築の知識もない、ましてや古民家の知識は鑑定士の資格をとっただけという私が一番初めにやったのは、山口県で古民家を活用して素敵に暮らす人、古民家を再生してお店を営む人たちをとにかく取材してまわることだった。

今でこそ、ちょっとした「古民家ブーム」だが、その当時はまだ古民家といえば「暗い」「寒い」「怖

い」「ただのぼろい家」というマイナスのイメージが強かった。そこで、古民家で素敵に暮らす人々たちをホームページで紹介することで、人々の古民家に対する意識を「かっこいい」「おしゃれ」というふうに変えていけたらいいなと思ったのだ。

さらに、女性ならではの感覚を生かして、「古民家大好き女子部」という、古民家大好きな女性が集まって楽しく活動するサークルも作った。古民家カフェに行ったりランチをしたり、古民家を会場にコンサートや料理教室を開いたりして、「古民家好きの輪」を広げていった。

こうした活動や様々な取材を通して、県内各地の古民家を数多く見て回ることができ、改めて、古民家にも色んなタイプがあることに気付かされた。どんな家でも再生できると安易に思っていたが、実際は解体した方がいいものも多く、一概にすべての古民家を再生すればいいというものではないこともわかった。また、古民家の維持に悩む人たちにも多く出会った。ご先祖様が建てた立派な家を壊すのは忍びないという気持ち、しかし自分たちは都会に出ていて帰る気もない、このままだと朽ちていくのを見ているだけ、など様々な声を聞いた。

その一方で、インターネットで古民家の記事を紹介しているうちに、都会から「山口に移住したい」「古民家で田舎暮らしがしたい」という問い合わせが来るようになった。また同時期に、山口市が、阿東・徳地といった過疎地域の空き家を活用して移住希望者の受け入れを進める事業を始め、私は古民家鑑定士という立場と、情報発信力



古民家カフェでランチ会



田楽庵の再生工事の様子

田楽庵のお披露目会。ファーストレディーの
安倍昭恵さん（前列中央）を囲んで記念撮影

今後は、移住希望者をただ受け入れるだけでなく、移住者に対するソフト面でのフォロー、雇用対策なども地元の人たちと一緒に考えていきたい。

田舎生まれの私は、都会や海外への憧れが強く、これまでバックパッカーやホームステイをしながら世界10カ国を旅してまわった。そんな私の今の夢は、日本の素晴らしい伝統文化と技術の結晶ともいえる「古民家」を一つでも多く残し、海外の人たちに見てもらいたい。まだ始まったばかりだが、今は、本気で山口の古民家を世界に発信していきたいと思っている。

を買われて「山口市定住サポーター」に任命された。こうした流れの中で、私たちの活動を様々なメディアにも取り上げてもらい、古民家に住みたい人と空き家の維持に悩む人たちのマッチングが始まった。

古民家専門の職人たちとの出会い

起業3年目を迎えた今年、強力な助っ人が仲間になった。マッチングをしていく中で課題だったのが、古民家に住みたい人と家が見つかったとしても、手を入れなければ住めない状態のものが多く、また伝統工法で建てられた古民家の再生は難しく職人の熟練した技術が必要なこと、しかし私には建築の知識が乏しくその後のフォローができなかったことだ。

そのため、家は見つかっても誰に頼んでどのよ

「古民家再生のモデルハウス」誕生

うに再生すればいいのかわからず、躊躇する人も多かった。そんな中、今年から「おんなたちの古民家」に建築のプロが加わってくれた。その繋がり、古民家を専門とする職人さんにも数多く出会うことができ、大工、左官、塗装職人などなど、最高の古民家専門チームができていった。

今では、家の状態や住む人の希望によって、耐震に強い設計士、デザイン性重視で再生したい人向けの設計士、熟練の知識をもった大工など、連携業者も20社を超え、私たちが窓口となって施主さんの希望をしっかりと聞いてあげながら、都会から来た人たちにも地元の信頼できる業者を紹介できるようにになった。

今年の夏には、銀行融資を受けて築400年の

茅葺き屋根の古民家を当法人で購入。屋根と柱だけを残し、職人チームで一からすべて再生した。

その古民家は、私が定住サポーターとして活動する阿東徳佐地域にあり、「旧山見邸 田楽庵（でんがくあん）」と命名した。さらに農家民宿の許可を取得し、移住希望者が実際に田舎暮らしを体験できる宿泊施設として、また古民家を再生したらどうなるのか、わかりやすく見てもらえるモデルハウスとしてよみがえらせることができた。

田楽庵の名誉会長には、私が記者時代に交流のあった、現在ファーストレディーの安倍昭恵さんに就任していただき、10月中旬には地元の方たちを招いて、昭恵さんとお披露目会も開催した。

山口の古民家を世界に発信

「二日マルシエ」で交流の輪を拡大 —うだつの町並みの古民家を活用—

徳島県三好市 地域おこし協力隊
特定非営利法人マチトソノ理事

● 吉田絵美

私が総務省の事業である「地域おこし協力隊」として、徳島県三好市に着任したのは2011年

8月。三好市は人口3万人弱、高齢化率38%を超える典型的な過疎地域です。JR土讃線の阿波池田駅周辺の中心市街地である池田町マチ（マチは地域の名称）は、明治大正期に「刻みたばこ」で財を成し、うだつの上がった歴史ある建物が町並みに多く残っています。しかし、少子高齢化が進み、空き家や空き地が増加しており、その景観の存続が危機に瀕しています。地域おこし協力隊として三好市に赴任し、この現状を目の当たりにし、何かできないかと取り組みを始めました。

◆◆◆ 築150年の元呉服屋が イベントスペースに

まず、地域の方に現状の話を聞こうと伺ったのが黒木公子さんでした。黒木さんはうだつの残る町並みの「本町通り」で様々なまちおこしの活動を長年行っている方です。「この地域で町並みに関わることをしたい」と相談したところ、見つけ

てくれたのが元呉服屋で、築150年弱の空き家でした。

すぐにそこに住まいを移し、ボランティアの手を借り掃除や簡単な改修を行いました。そして、店舗だった部分を2011年11月にイベントスペース「スペースきせる」としてオープンしました。地域住民が気軽に寄り合えるような場所として、現在も使用しています。

◆◆◆ 「うだつマルシエ」で人の輪が拡大

前述の黒木さんと地域住民の方たちと「スペースきせる」にたびたび集まり、話を重ねていくにつれ、このうだつの町並みに多くの人に訪れてもらい、もっと魅力を発信したいという意図で、様々な企画が生まれました。その中のひとつが「うだつマルシエ」です。

2011年11月から年に3回、うだつの残る町並みの古い空き家や空き地を活用して、四国中の手作り雑貨の作家さんと農家、加工品の生産者が

集まり、一

日マーケット

トを行って

います。懐

かしい会場

と、生産者

と直接話が

できるアッ

トホームな

雰囲気人が

気を博した

のか、現在

では平均して2000人弱の来客があります。

また、三好市池田町は「四国のへそ」と呼ばれる場所に位置しているため、四国四県から出店者も集まっています。その出店がきっかけとなり、2013年4月から「スペースきせる」に一日カフェとして出張販売してくれる方も出てきました。

さらに、「うだつマルシエ」の出店場所を確保するために「本町通り」の家々の軒先や内部を貸し出してもらえないか交渉して回りました。そこから、「本町通り」の空き家に少しずつ動きが出てきました。

◆◆◆ 空き蔵がギャラリーに

「本町通り」にある「まちかど資料館」は、旧商家で立派なうだつの残る邸宅と、資料館に改装された蔵がありましたが数年間使用されず放置されていました。そこで2012年2月から「うだ



「スペースきせる」は築150年弱の元呉服屋。地域住民が気軽に集まれる場所として活用されている



うだつの町並みの空き家などを利用した「うだつマルシェ」の様子



うだつマルシェ。1日約2,000人の来客がある

「つマルシェ」で内部を使用することになり、まずは収蔵されていた地域の伝統を残す引き札（広告用のチラシ）や絵葉書の展示会を行いました。その後、「うだつマルシェ」では地元の手作り作家やアーティストの作品展示の場として活用しています。

◆◆◆ 廃旅館をサテライトオフィスに

「本町通り」にある「旧政海旅館」は、天皇陛下も宿泊したことのある由緒ある旅館でしたが、数年前に廃業となりました。大正レトロな建物を活用できればと、「うだつマルシェ」の一環とし

て2012年5月からイベント会場に利用し始めました。

そして、ちょうど徳島県が推進しているサテライトオフィス事業の候補地となり、2013年3月から東京の「株式会社あしたのチーム」が入居することになりました。現在では現地雇用のスタッフ5名が常勤しており、閉まっていた旅館に明かりが毎日灯るようになり、視察も全国から多数訪れています。

◆◆◆ NPO法人設立と広域での連携

こうした活動を積み重ねてきた結果、2012

年11月に「NPO法人マチトソラ」が地域住民の手で立ち上がりました。三好市は、「マチ」と呼ばれる四国の交通の要所として栄えた中心市街地の阿波池田と、「ソラ」と呼ばれる祖谷や大歩危小歩危（おほほけこぼけ）などのあ

る山間部があり、それぞれの地域で古くから続いてきた暮らしや伝統を活用していくというのが設立の趣旨です。「うだつマルシェ」の企画や、「ソラ」と呼ばれる地域での農作業体験ワークショップなどを実施しています。また、2013年11月に初めて実施した「マチトソラ芸術祭」では、東祖谷に残る重要伝統的建造物群保存地区である落合集落とうだつの町並みをつないで、現代アートの展示や電子音楽の演奏、アーティスト本人によるワークショップを行うことで、そこで暮らす方の日々新しい出会いをもたらす、訪問者にも地域の魅力を伝えました。

◆◆◆ 今後の展望

「古民家の活用」や「うだつマルシェ」は、様々な人が行き交うことで、次の世代を担う若者たちが地域に魅力を感じ、交流を深め、新しい可能性をつくっていくことを目的としています。今後この趣旨で活動を広げていこうと考えており、若い事業主が新しくチャレンジする場として「スペースきせる」は1日から借りることのできるシェアカフェに改築を行う計画を進めています。地域には若者から見ると魅力的なものが実はたくさん眠っており、新しいものを作るのではなく、その魅力を掘り起し、見せ方を変えて発信していくことが効果的だと考えています。また、古民家のようにその地域での独特な暮らしの雰囲気が残るものが活用されていくことは、地元の人にとっても誇りになるのではないのでしょうか。

学生主体で古民家を再生

―地域と大学の連携促進を目指して―



糸島空き家プロジェクト事務局長
(九州大学大学院人間環境学府 修士課程)

● 吉田健志



糸島空き家プロジェクト代表
(九州大学新キャンパス計画推進室 教授)

● 坂井 猛

「糸島空き家プロジェクト」とは

2005年に九州大学が糸島半島(福岡市西区、糸島市)に移転を開始した。産官学による学術研究都市の実現に向けた企業誘致とまちづくりが進む中で、この伊都新キャンパス周辺には学生を目的に次々とワンルームマンションが建設されたが、価格帯・居住スタイルが均質化したワンルームマンションなどに住む学生と地域住民との交流の断絶が問題視された。

さらに、半島西部の糸島市では、人口流出と少子高齢化に起因する空き家や空き店舗の増加が課題となってきた。

2011年度に九州大学の坂井研究室が「糸島市九州大学連携研究助成金」を得たことが契機となり、糸島市の老朽化した戸建て住宅等を対象と

し、同市の地域特性に配慮しつつ、学生のライフスタイルやコスト等のニーズに適合する居住環境を実現するため「糸島空き家プロジェクト」が発足した。

プロジェクトの構成メンバーは、建築、農学、経済等を学ぶ学生及び教員であり、学生が、教職員や専門家、行政、地元企業、地域住民とともに、空き家の改修や完成後の運営に主体的に関わることで、プロジェクトが進行し、地域と大学の交流が深まるきっかけをつくりだしている。

地域に開かれたシェアハウス

「糸島空き家プロジェクト」が最初に取り組んだのは築約40年の店舗付き住宅のシェアハウスとしての改修だった。

若年人口を増やしたい糸島市と、設計だけでな

く施工・実現の機会を得たいという学生の希望が一致し、JA糸島の協力を得て空き家を提供していただく所有者を見つけた。

改修の方針として、①学生による企画と設計、②地域ボランティアと学生による施工、③糸島に住む学生ならではのライフスタイルの情報発信―という3点を挙げ、かつて店舗部分であった土間を「まちの縁側」と称するコミュニティスペースとして活用することで、地域に開かれたシェアハウスを実現した。

「まちの縁側・糸家」と名付けたこのシェアハウスは2012年2月に竣工し、入居した大学院生が中心となって、地域住民との食事も、地域の子どもを対象とした寺子屋、英会話教室、地域の音楽家を招いてのライブなど多彩な活用を進めている。

歴史ある古民家が学習塾に

第2弾となったのは九州大学伊都キャンパスに隣接する築130年の古民家を学習塾として改修したプロジェクト。机と椅子が整然と並ぶだけの市街地の学習塾とは一線を画し、歴史ある古民家の特徴を活かしたアットホームな学習塾を提案したいとの思いから、杉材をふんだんに用いたフロアリングや既存の梁を活かした吹き抜け空間をつくりだした。

地元の建設会社と連携し、企画・設計・施工すべてに学生が関わって改修を進め、漆喰塗り、家具作り、焼き杉などのワークショップを積極的に開催し、多くの学生と地域住民を巻き込んだプロ



シェアハウス「糸家」。地域の子供たちが学ぶ場としても活用されている



第2弾、学習塾の家具作りをする様子



コ・ワーキングカフェ「がやがや門」の内部。学生活動や地域交流の場として機能している

のプロセス、組織の運営、地域の方々とお酒を酌み交わすなかでの人生経験など、実に多くのことを学ぶ機会となった。空き家の再生を通じて生まれた繋がりによって、地域と大学がお互いに良い影響を及ぼし合っている。学生は卒業によって毎年少しずつ入れ替わるが、このプロジェクトが、活動に関わる人それぞれにとっての有意義な場であり続けることを強く願っている。

ジェクトに成長した。2012年7月に竣工し、歴史ある古民家は、子どもたちの活気あふれる学習塾として生まれ変わった。

◆◆◆ 学生と地域住民の「コ・ワーキングカフェ」も整備

第3弾は、前述の古民家の納屋として使われていた「長屋門」を学生と地域のコ・ワーキングスペースとして改修したプロジェクトである。

伊都キャンパスを中心に活動している学生団体の多くは、活動の拠点となる場所を持たず、ボードやプリンターなどのない空き教室などで活動している。また、地域に学生や地域住民が気軽に立ち寄ることのできるカフェがないことも課題であった。そこで、地元の商工連合会がスポンサーとなつて、学生との協働でプロジェクトを進め、気軽に場所を使える「コ・ワーキングカフェ」を実現した。

このコ・ワーキングカフェ「がやがや門」は2012年12月に竣工し、学生活動や商工連合会だけでなく、地域交流の拠点として機能している。空き家改修の経験を活かし、更なるステップアップを目指した活動であった。

◆◆◆ 農園付きシェアハウス

第4弾は増改築が繰り返された築60年の空き家を、地域協働農園付きシェアハウスとして再生するプロジェクトである。糸島市は農業振興に特に力を入れており、そこには学生を含む若年層が農業に関心を持ち、あるいは農業に参加することによるプラスの可能性があると考えた。これは、私たちの活動のコンセプト「糸島ならではの多様な学生居住環境の提供」に合致する。

そこで、「農」を通じて人々の交流が生まれるような農園・イベントスペース付きのシェアハウ

スを実現し、講習会、教室、食事会の場として地域に開放することにより、学生と周辺住民の交流を生み出すことを目的として、2013年10月に着工し、現在、改修工事を行っている。

◆◆◆ 地域と大学の繋がりをつくるプロジェクト

糸島空き家プロジェクトは、古民家などの空き家を改修するプロセスを通して、地域と大学の繋がりを生み出すプロジェクトである。地域住民や地元企業、行政などの協力の下で、学生が主体となつて空き家改修の企画・設計・施工・運営に関わり、プロジェクトを動かしていくことで、空き家の改修前、改修中、改修後のすべての過程で地域を巻き込み、地域と大学の連携によって、まちの再生が可能であることを実証した。

地域住民は学生との交流を楽しみとして捉えていただくようになり、学生にとっては、建築工事

古民家民宿で島の活性化目指す —観光客誘致、雇用の場も確保—

沖縄県渡名喜村総務課企画係 ● 桃原礼子

独特な赤瓦屋根の集落景観

渡名喜村は、渡名喜島と入砂島の2島から構成され、沖縄本島的那覇市の北西海上58^キの洋上に位置している。那覇から、フェリーで約2時間余り、周囲12・5^キ、面積3・59平方^キの小さな島で、平成25年現在、400名余りの人々が暮らしている。

輝く白砂の道とその道より掘り下げられた屋敷地、そこに建つ赤瓦屋根の住宅、緑の福木（ふくぎ）林など渡名喜島の集落は独特な景観を保っており、平成12年には国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。渡名喜島の赤瓦家の歴史は古く、明治期に始まり大正の終わり頃には、300近い家屋の9割を赤瓦家がしめたと言われている。

このように現在にいたるまで、島に受け継がれてきた歴史と豊かな自然環境、渡名喜島固有の伝統的な集落景観を今後も変わることなく守り、後世に伝えていくことが大きな課題となっている。

古民家を利用し民宿事業

こうした中で、村では平成12年に米軍基地がある市町村に対する国の「島懇事業」（米軍基地所
在市町村活性化特別事業）を活用し、古民家を再生して観光や地域活性化に利用しようという事業が始まった。古民家は食堂1棟と民宿施設6棟に改装された。集落観光用として1人乗りのバッテリーカー10台が導入されたほか、管理センター、ハイブリッド車2台、バス1台が整備された。

渡名喜村では平成19年2月、島民を対象に、この「島懇事業」で整備した再生古民家（食堂と民宿6棟）などを運営する事業者を公募した。手上げたのが南風原豊氏（54歳）だった。同氏は平成19年3月、株式会社を設立し、4月から「民宿ふくぎ」の運営をスタートさせた。

村では民宿ふくぎに対し、「若い人の雇用の場を確保してほしい」と要請し、観光・雇用・地域活性化をテーマに事業を行うことになった。

観光誘客で様々なアイデア

ところで、島全体の宿泊キャパは80人だが、このうち「民宿ふくぎ」の定員は6棟で30人である。事業スタート時からの「民宿ふくぎ」の利用客数は、平成19年600人、20年1800人、24年には2200人と順調に推移しているものの、損益分岐点は年間2500人。これをクリアするためには1日平均7人以上の宿泊客が必要だ。

南風原氏は、今後の誘客対策について「冬場は、花粉症対策で長期滞在者を増やしたい。また、様々な企画を考えていく。例えばお客さんに畑を提供し、体を動かしながらゆっくりしてもらおうプログラムもある」と指摘。さらに「渡名喜の農作物はほとんど農薬を使わないため安全。また海産物も非常に安全であるという強みを生かしたい。高齢者サービスなどとの地域交流も考えている」と意



渡名喜島の航空写真



食堂に改装された古民家の外観

海を体験交流に生かす

欲的に話す。

また、1週間以上の長期宿泊者には、農作業体験用の畑のほか、収穫物を提供する企画も考えている。季節の野菜づくりを中心としたメニューで、収穫したものをそのまま送るか、宿泊施設で使うもの以外を島内販売し現金化して送るか選択してもらうという。

野菜などの成長の様子はブログで配信して、民宿利用者と継続的なコミュニケーションを図る。自生している薬草のニガナやフーチバーのほか、冬場に咲くランも生かせるだろう。このように渡名喜には貴重で身近な資源がたくさんある。



古民家食堂の様子

一方、渡名喜といえば、海人（うみんちゅ）の島だ。島の周囲の魚影は驚くほど濃く、テラジャーやハマグリなどの貝、アーサなどの海藻はふんだんにあり、まさに海の畑である。これを体験交流に生かす。

現在、「民宿ふくぎ」では、村や漁協と連携しながら①海人体験②ダイビング③ホエールウォッチングの3本立てで古民家民宿とのパッケージを考えている。海人体験では、追い込み漁のほかタコ捕りやアーサ採り、ダイナミックに魚を手づかみで捕る体験をしてもらう。渡名喜の魚影の濃さ、ダイビングポイントのすばらしさには定評がある。

また、「観光・雇用・海」を守るという3つの視点でダイビングサービスの誘致が議論されている。

る。こうした島全体にかかわる事業を行うため、「民宿ふくぎ」が中心となり、行政とも連携しながら、島民が潤う仕組みづくりを進めていく。そうすれば「島がひとつにまとまって動くことができ、国などとも交渉しやすい」と南風原氏は強調する。

魅力ある村づくりを目指す

これまで島の人々は観光客に対して一線を引いていた。地域住民と観光客が接することは、あまりなかった。こうした傾向を変えるには島の人だけでは難しい。Uターン者を積極的に活用していくことが重要で、彼らは島と観光客との架け橋になってくれるだろう。

このように渡名喜村では、古民家を活用した「民宿ふくぎ」の取り組みからスタートし、現在では、集落景観に配慮しつつ、空き屋を修理し伝統的な住宅を整備している。

これまで村外から移住に関する問い合わせは多くあるものの、住まいが確保出来ないために移住を断念したケースもある。こうした状況を少しでも打開するため、島で暮らす意思のある、Uターン者など誰もが低コストで利用出来る住宅を整備しようという計画だ。

今後も貴重な自然環境や先人達が築いた歴史文化を生かしながら、空き家の整備や観光誘客などに取り組み、魅力ある村づくりを進めていきたいと思っている。



故郷への思いから

高知県津野町長 ● 池田三男

津野町は、高知県の中西部、高知市から車で1時間ほどに位置し、平成17年2月に2つの村が合併し誕生した人口6400人ほどの小さな町です。

町の9割は林野で占められ、その山々を源とする日本最後の清流と呼ばれる四万十川、ニホンカワウソが最後に目撃された新莊川、この2つの河川の源流点を持ち、日本三大カルストのひとつ四国カルストをはじめ豊かな自然の中で、津野山古式神楽、花取り踊り、農村歌舞伎など数々の伝統文化のある町です。基幹産業は農林業ですが、過疎化、高齢化が進む中、森林の荒廃、耕作放棄地の増加、鳥獣害などが深刻化しつつあります。

町には84の集落があり、自治組織として様々な活動を行っています。過疎高齢化の波は少しずつ集落機能を低下させつつあり、見守り、支え合いの仕組みづくりが大きな行政課題となっています。こうした典型的な農山村でありながら、合併から9年、町民が一つとなって融合から飛躍へ向けての大きな山を乗り越えようと故郷津野町としての誇りと自信、やる気が芽生えはじめています。

地域活性化センターの全国地域リーダー養成塾では、2期生（平成2年度）として、まちづくりに燃える全国各地から集まった皆さんといっしょに多くのことを学びました。この執筆の依頼をいただき、あらためて当時の写真を見ますと懐かしさ、酒を酌み交わしながらの交流会がいつも盛り上がり楽しい研修だったことを思い出します。

当時、私は旧葉山村の企画室に配属され地域活性化を手掛ける組織の設立に携わり、地元では地域づくりサークルの活動にも関わっていたことから、すべてが大きな刺激であり、貴重な体験となった塾でした。

平成21年2月に町政運営を預かり「元氣な津野町」を目指したまちづくりに町民とともに取り組んでいます。

就任当時は、合併4年の融合を推進しなければならぬ時期で、まずは町民の生の声を聴くことを第一とし、1カ月ほど掛けて各地区で座談会を開催することから始めました。今では、この毎年の座談会もまちづくりに町民が参加する機会ともなっており、年ごとにその内容も要望陳情の形から、自分たちの地域は自分たちの手で守りつくりうとする動きが芽生え、地域の元気を生み出すことに繋がりは始めています。

産業面では、衰退する農業を再生させようと直販事業による地産外販の取り組みを推進しています。津野町は、古くから土佐の銘茶の一つ「六蔵茶」の産地として茶業が盛んに行われてきた町で、今も豊かな自然の中で栽培されているお茶は、色や香りもよく、高い評価を受けています。このお茶を使った特産品づくりに取り組み、「ほうじ茶大福」を主力とする加工品を昨年商品化しました。

この商品を直販のトップランナーとして、地域で栽培される新鮮な野菜や様々な加工品を販売するアンテナショップを高知市にオープンさせ、直販事業による地産外販を推進しています。競争が激化する直販事業で、一定の成果が得られていることは、町の大きな活性化の原動力になっていると思っています。

過疎高齢化に対しては、子育て支援、若者定住を重点施策の一つとして取り組んでいます。中学生までの医療費の無料化、幼稚園授業料の無料化など子育て支援の充実、若者定住住宅分譲、住宅取得奨励助成事業などの若者定住の支援事業と合わせ、定住に繋がってきています。また、今年度からは教育を津野町に住む魅力の一つに位置づけようと、特色ある教育を築き上げるため教育委員会に学力向上対策室を設置し取り組んでいます。

動き始め、光り輝き始めた津野町「清流と風と歴史に会えるまち」をキャッチフレーズに町民とともに頑張っています。

三重県の「旬」の魅力を発信！ 「三重テラス」オープン

三重県雇用経済部三重県営業本部担当課 主査

● 山本佳子

三重県は、都内初となるショップ、レストラン、イベントスペースで構成される首都圏営業拠点『三重テラス』を去る9月28日（土）に、東京・日本橋にオープンしました。この『三重テラス』を核に、「食」や「観光」、「歴史」、「文化」、「産業」などの三重県の「旬」の魅力について、今後強力に発信してまいります。

三重と日本橋との縁

三重県は、歴史と豊かな自然に恵まれたところです。本年、20年に一度の「式年遷宮」を迎えた伊勢神宮や平成26年に世界遺産登録10周年を迎える熊野古道、松尾芭蕉や忍者のふるさと伊賀、モータースポーツの聖地・鈴鹿サーキットなど、多くの観光地を擁しています。

一方、日本橋はかつて多くの伊勢商人のお店が軒を連ねた場所であり、今なお、三重ゆかりの企業がた

くさんあります。また、日本橋から伊勢神宮へのルートは、江戸時代の旅文化のゴールデンルートでした。このように日本橋という地は歴史的にも三重県との関わりが深く、首都圏、さらには世界とつながる三重の新しい玄関口でありたいという思いが込められています。

三重の魅力のショールーム

1階のショップは、「本物志向」「品質重視」「価値重視」を基本に、三重の豊かな自然と歴史に育まれた食や伝統工芸品を販売しています。また、伝統工芸の良さを生かしたプライベートブランド商品なども取り揃えています。

同じフロアで展開するレストランは、三重県の旬の食材をイタリアンスタイルで仕立てたメニューをご提供し、三重の豊かな山の幸・海の幸をご堪能いただいています。

さらに、

2階に設けたイベントスペースでは、三重県の文化・伝統・風土などを知ることのできる場として企画展やセミナーのほ

か、三重県内の生産者と首都圏の事業者との商談会などを開催しています。もちろん観光パンフレットもご用意し、三重への旅のご相談も承っています。

内装では、尾鷲ひのきを使用した什器をはじめ、伊勢神宮をイメージした木の格子天井、組子の天井照明や伊勢形紙の行燈、伊勢木綿のカーテンや鈴鹿墨染めの暖簾、四日市萬古焼や伊賀焼のタイル、伊賀くみひものメニューブックなど、三重県が誇る匠の技をショールームのように随所に設えた、品格のある空間を演出しています。

三重テラスの役割

『三重テラス』の役割は、三重県内の事業者が首都圏での販路拡大を



1階のショップの様子



2階のイベントスペース

図る「出口」として活用していただく場であるとともに、首都圏の方々が三重を訪れていただく「入り口」として三重の魅力を発信する場であることと考えています。今後は、三重県ゆかりの店舗や企業等との連携、新しいアイデアの創出などにつながる営業活動を総合的に進め、県内への観光誘客や県産品の販路拡大につなげていきます。

ぜひ、『三重テラス』で、三重の「旬」の魅力を存分にご堪能ください。「おもてなし」の心で皆様のお越しを心からお待ちしています。

【交通アクセス】

地下鉄銀座線、半蔵門線の「三越前」駅に直結

多様な地域資源を組み合わせたまちづくり 「分散・体験型見本市」に焦点を当てて

立命館アジア太平洋大学大学院教授 ● 三好皓一

地域活性化センターでは、地域再生の担い手となる人材の育成を目的としたワークショップ「地域再生実践塾」を開催している。今月号では大分県別府市で行われた第5回実践塾の開催内容について、主任講師の三好皓一立命館アジア太平洋大学大学院教授にご報告いただいた。

(地域支援課)

はじめに

全国各地で地域資源を活用した独自の地域再生の試みが行われる中、大分県別府市では、コミュニティ・ベースの事業活動を基礎に地域資源の発掘、地域間ネットワークの構築による体験型イベント「オンパク(別府八湯温泉泊覧会)」やその温泉地特有の文化的景観を活かしたまちづくりを行い、地域の再活性化に取り組んでいる。また、平成12年に設置された立命館アジア太平洋大学(APU)は学生や教員の約半数が外国人であり、多くの外国人が暮らすまちとして賑わいをみせている。さら

に近年では、こうした地域資源に創造性のある現代アートを取り入れることで、新たな魅力の創出を図る取り組みも行っている。

実践塾では、このような別府の経験を地域資源の活用による「まちづくり」、「地域づくり」として概念化した「分散・体験型見本市」の活用を焦点を当てて行った。また、実践塾は、概念と実践を組み合わせた講義とワークショップで構成し、「分散・体験型見本市」の開催のための計画づくりを体験することによって「まちづくり」の実践を目指すものとした。以下、概要を説明する。

「まちづくり」のための 概念と事例

まず、総論・問題提起として、三好が、地域開発における代替アプローチの必要性和地域開発のための集会的活動による組織的な付加価値創造の重要性を指摘し、特に、別府オンパク、その流れを組む総社「みちくさ小道」、そして「長崎さるく」の経験を踏まえた「分散・体験型見本市」の概念について紹介し、その「まちづくり」への活用可能性を強調した。

分散・体験型見本市は、多様な地域資源を活用した地域の人々による小さな体験型プログラムを多数集め、イベントとして広く紹介する事業である。イベント・オーガナイザーと多数のプログラム提供者との適切な役割分担を行うことによって、地域の見どころさがちな活動を広く人々に周知させると共に、その活動の促進によって地域の活性化を目指すものである。

次に、特別講師の浜田別府市長から、地域づくりのための行政の取り組みについての事例報告をいただいた。別府市は、海、山、緑そして豊かな温泉に恵まれており、こうした恵まれた自然の中で一層住み良い生活を確保することによって、住む人も訪れる人も、いきいきと輝く、豊

かな生活交流圏の創造に努めていることが強調された。

「NPO法人ハットウ・オンパク」の門脇氏からは、地域の活性化のための地域資源の発見とその多様な地域資源を組み合わせた「まちづくり」の必要性和、地域の人々が主役になる場、新たなチャレンジを起こす場、チャレンジのフィールドを広げる地域インフラとしての別府オンパクについて紹介いただいた。

また、「NPO法人BEPUPU PROJECT」代表理事の山出氏からは、地域の課題を解決し新たな魅力を創出するための、アートによって地域をつなげる「BEPUPU PROJECT」の活動、別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」の開催、「ベップ・アート・マンス」の開催等、アートを活かした別府のまちづくりについて紹介いただいた。

さらに、立命館アジア太平洋大学事務局次長の村田氏からは、84カ国・地域の学生が作り出す多文化キャンパスと、日本人・留学生入り交じったの課外活動、小中学校での国際理解教室や地域イベントにおける地域交流等、別府市の文化の多様化に対するAPUの貢献について紹介いただいた。

いずれも、多様な地域資源を活用した小さなプログラムを多数とりま



参加者によるイベント計画策定のためのグループ作業

まず、別府オンパクから始まる「分散・体験型見本市」について、岡部氏がタイ・スリン県において実施した「スリンよいものフェスティバル」の事例を紹介し、文脈の異なること

ワークショップでは、参加者は6つのグループに分かれ、三好と「インステイチュート・フォー・コミュニティ・デザイン」事務局長の岡部氏がファシリテーターとなり、グループごとに「分散・体験型見本市」によるイベント開催計画づくりについて議論した。

フィールド・ワークとしてのワークショップ

とめ、大きく展開することを目指すものであり、分散・体験型見本市に通じる要素を含むものであった。



フィールドワークの様子（竹瓦温泉）

ろでのその活用可能性と効果を確認した。また、具体的なプログラム事例として、別府鉄輪と北浜で「まちあるき」を体験し、新たな気づきの場としての「まちあるき」プログラムのイメージを確認した。

「分散・体験型見本市」によるイベント計画づくりの作業は、グループ・メンバーが特定の地域コミュニティに帰属していると想定し、自分たちの体験をもとに議論し、今後それぞれの地域で、また、それぞれの地域の文脈の中で開発に活かす契機となることを目指し、下記の設問をもとに行った。

（1）メンバーが知っている地域の達人（特定分野に秀でた人材）を20人〜30人挙げ、彼らがそれぞれの場で提供し得る小さな体

験型プログラムを提示する。
（2）提示したプログラムの中から具体例2つを選択し、詳細を設定し、プログラムのイメージを確認する。
（3）想定した20〜30の体験型プログラムを一定の期間に「分散・体験型見本市」のイベントとして実施することを想定し、実施のための作業スケジュールを作成する。

作業は、用意したテンプレートを活用しつつ、模造紙にポストイットを使い行なった。作業はグループ・メンバーが実名で達人を推挙し、議論が具体的にできるよう努めた。各グループは、熱心に議論し、興味深い計画を策定し、結果を報告した。

おわりに

今求められている「まちづくり」は、外部からの大きなハードやソフトに依存するのではなく、多様な地域資源を組み合わせ、地域の人々によって継続的に再現し得る活動を推進していくことを基本とする「まちづくり」である。多様な地域資源を活用した小さな活動を多数集めることによって、「まちづくり」のための大きな力をつくりだすことができる。本実践塾はそのような思考への契機になればと考え実施した。

平成25年度第5回 地域再生実践塾の概要

<日程>

第1日目 平成25年10月23日（水）

Lecture 1 「総論・問題提起」

主任講師：立命館アジア太平洋大学大学院アジア太平洋研究科 教授 三好 皓一 氏

Lecture 2 「地域づくりのための行政の取り組み」

特別講師：別府市長 浜田 博 氏

Lecture 3 「オンパク（別府八湯温泉泊覧会）について」

特別講師：NPO法人ハットウ・オンパク 門脇 邦明 氏

Lecture 4 「アートを活かした別府のまちづくりについて」

特別講師：NPO法人BEPPU PROJECT代表理事 山出 淳也 氏

第2日目 10月24日（木）

Field Work 1 「分散・体験型見本市を使ったワークショップの活用」

特別講師：Institute for Community Design 事務局長 岡部 有美子 氏

Lecture 5 「APUと別府市の関わりについて」

特別講師：立命館アジア太平洋大学事務局次長 村田 陽一 氏

Field Work 2 「立命館アジア太平洋大学視察」

Field Work 3 「鉄輪温泉街・北浜エリアまち歩き」

Group Work 1 「視察・体験結果のとりまとめ」

主任講師：三好 皓一 氏

ファシリテーター：岡部 有美子 氏

第3日目 10月25日（金）

Group Work 2 「グループ発表・講評」

主任講師：三好 皓一 氏

Lecture 6 「総括」

主任講師：三好 皓一 氏

移住促進に向け「ほんまもん」の交流会

～紀美野町でのライフスタイル示す～



特定非営利活動法人「きみの定住を支援する会」

● 宮根恭子

都市から地方への移住・交流は、人口減少社会における地域活性化策の柱として期待される。地域活性化センターでは、「移住・交流による地域活性化支援事業」として、地域団体もしくは市町村等が自主的・主体的に実施する、都市住民などを受け入れる事業を支援している。今回は平成24年度に同事業を活用した和歌山県紀美野町の取り組みを特定非営利活動法人「きみの定住を支援する会」の宮根恭子氏にご紹介いただいた。

(企画・コンサルタント業務課)

豊かな自然や「食」、 絶えない観光客

和歌山県海草郡紀美野町は、和歌山県北部に位置する人口1万127人(平成25年9月現在)の中山間地です。平成18年1月1日に旧野上町と旧美里町が合併し、互いの町名と紀州の紀を用いて、「紀美野町」になりました。

高野街道に並ぶ歴史的建造物、スキが生い茂る生石高原や美里天文台など、歴史や自然に触れることが

できるほか、個性豊かなパン屋、地元の素材にこだわったフランス、イタリア料理屋、農家が作る本格的ジェラート屋、カフェを併設する陶芸ギャラリーなど、食を楽しむこともできます。

関西都市圏から1時間半程度と比較的アクセスが良く、また高野山まで1時間程度の距離にあるため、1年を通して観光客が絶えません。

続く人口減、移住・交流を推進

一方で、合併以降の6年間、年間100人のペースで人口減少が続いています。特に旧美里地域の人口の減少が大きいため、「美里ふるさと村」を拠点とした都市農村交流プロジェクトを平成12年ごろに始めました。また、平成18年には和歌山県が推進する「わかやま田舎暮らし支援事業」の移住・交流に関わるモデル町になり、役場内に移住相談から地域案内までを行う一元的窓口(ワンストップパーソン)を設置しました。現在は、町と地域住民で構成されるNPO法人「きみの定住を支援する会」が連携し、移住・交流を進めています。



地元住民との交流会の様様

いない状態でした。そこで原因を検討した結果、空き家の提供元である地元住民に、「きみの定住を支援する会」の活動が知られていないこと、体験事業参加者に紀美野町での実際の暮らしを伝えることが出来ていなかったことなどが問題として浮かんできました。

移住促進に向け交流会、 388人が参加

そこで、地域活性化センターの「移住・交流による地域活性化支援事業」を活用して、「きみの定住を支援する会」が主体となって「ほんまもん交流会」を開催することにしました。

事業の実施にあたっては、体験内容の充実はもちろん、地元住民と移住希望者、移住者と移住希望者、移住希望者同士の「交流」を主軸に置

くことを決めました。そのため、紀美野町の真国地区で芸術を取り入れたまちづくり事業に参加した実績を持つ「移住者の母の会（ままーず）」をスタッフに迎え、先輩移住者の視点を多く取り入れることにしました。

「ほんまもん交流会」では、8つのプログラムを合計28日間実施することになりました。大阪圏内からの移住の問い合わせが多いことを考慮し、大阪ふるさと回帰支援センターや関連公共施設、町近郊の飲食店やタウン情報誌などに広報しました。その結果、延べ388人から参加申し込みがありました。

移住後のライフスタイルを提示

8つのプログラムでは、紀美野町の紹介↓移住に向けた安心安全な家庭菜園の作り方と初歩的な家屋改修



住民おすすめのスポットから町内を望む



先輩移住者の自宅を訪問した移住希望者ら

の技術習得↓田舎で働く、という3ステップを作り、定住後の生活の充実を意識した情報提供を行いました。

プログラムの講師には地元住民を招き、直接移住希望者と話をしていたことで、プログラムを実施する地区の地元住民と移住希望者が交流できるように配慮しました。

具体的には紀美野町の町史編集長や猟友会長が講師を行ったほか、地域散策のプログラムでは、区長にも協力を要請して地区の回覧板で移住希望者との交流会（お茶会）を開催する旨を広報しました。地元住民にも移住促進の協力者になってもらうため、「こんな何もないところ」と思っているところに移住を考えている人がいること、素晴らしい地域資源があることを、少しでも知っていただくのが目的でした。交流会の雰囲気は地区によって異なり、移住に真剣に取り組んでいる地区ほど具体的な生活に関する話となり、セミナーの

ような形になった所もありました。

このほか、紀美野町へ移住後に起業して事業を展開している方や、地域に溶け込み地域の仕事の担い手となっている方の講演会をプログラムに組み込みました。ビジネスを起こす基本的な心構えに加えて、田舎で起業するうえで考慮しなければならぬ点など、紀美野町に定住された方々に講演していただいた事で、リアルな紀美野町でのライフスタイルを参加者に提示することができました。

また、プログラム全体をとおして、「ままーず」の先輩移住者に気軽に相談できる雰囲気づくりにも努めました。移住希望者が先輩移住者に質問する場面も多くあり、「なぜ紀美野町を選んだか？」という質問が一番多かったとのことでした。「役場の対応が（他の役場と比べて）一番親切だったから」という先輩移住者の回答で、ワンストップパーソンの重要性和、連携している「きみの定住を支援する会」の意義を再確認できたことも成果のひとつです。

4世帯6名が移住決定

以上のようなプログラムを実施した結果、「ほんまもん交流会」で初めて紀美野町に訪れた移住希望者か

ら、4世帯6名の移住が決定しました。移住を決めた方は「紀美野町の雰囲気と、移住者と地元住民の関係が良かった」と話しています。

しかし、移住後も細かい問題が起こることがあります。「きみの定住を支援する会」ではそのような場合の相談に乗っていますが、近隣住民の方にも困ったときの相談役をお願いすることになっています。地区によつて地元住民との関係性が異なること、また、どのように地域に溶け込んでいくかは移住者の生活や考え方などによつて異なるため、答えは簡単には見えてきません。

また、紀美野町は豊かな自然と交通アクセスに恵まれ、移住の相談に訪れる人が増加傾向にあります。実際に移住となると、賃貸等が可能な空き家が不足しているほか、賃貸が可能であっても大幅な修繕が必要となることも多くあります。今後は移住希望者に即提供できる空き家の確保が最重要課題です。

これからも移住者と地元住民との友好関係を継続させることで、移住受け入れ態勢と、移住支援者となる地元住民の増加を目指す活動を充実させ、空き家や空き地など地域資源のさらなる活用へと繋げていきたいと考えています。

心のこもった活動で地域にきずなを 「さわやかな風」起こす、女性の会

京丹後市は、京都府の北部、丹後半島に位置し、山陰海岸国立公園・若狭湾国定公園に指定されている美しい海岸線をはじめ、清らかな河川、緑あふれる山野など豊かな自然に恵まれている。リアス式海岸の良好な湾や入江を通して、古代から大陸・朝鮮半島と活発な交流が行われ、市内各地には古墳や遺跡が数多く残されている。古くからのづくりの高度な技術を有する地として知られ、現在では丹後ちりめんの生産や農

業、機械金属工業、観光産業がまちの経済を支えている。

今回は京丹後市弥栄町の女性のみによる手づくりのグループ「ウィンズやさか野」の活動について、代表の今西茅織さん、役員の新谷記代子さんと梅田てるさんのお話を基に紹介する。

地域にイルミネーションを

ウィンズやさか野が発足したのは平成18年。そのきっかけは「今忘れられようとしている先人の暮らしや心、思いやりなどを次の世代に受け継いでいきたい」という今西さんの思いだった。

弥栄町には明治、大正、昭和、平成生まれの4世代が暮らしている。今西さんは、この4つの世代をあらわす灯りをともし、これからの時代が平和であることを祈るイルミネーションのイベントをやりたいと考え

た。しかし、やりたいという気持ちはあっても実際にどうしたらいいかわからなかった。

そこで市長に相談したところ、市の職員が協力してくれることになり、地域で活動していた女性たちに声をかけ、ウィンズやさか野を立ち上げることができた。メンバーの募集には270人が応じた。

こうして明治・大正・昭和・平成生まれの4世代の思いを込めて、4本の桜の木にイルミネーションを点灯した。

イルミネーション事業は今年で8年目を迎える。毎年趣向を変え、試行錯誤しながら実施している。電力は太陽光発電を利用し、環境保全や自然エネルギーの利用促進もアピールしている。太陽光発電の設備は京都府からの補助金を活用して購入することができた。

また、点灯式では、廃食用油や廃



東日本大震災からの復興を願ったイルミネーション

ガラス瓶を利用して作ったキャンドルを点灯し、ミニコンサートを開催したり、ぜんざいを振る舞ったりして、地域住民との交流を図っている。「みんなが喜んでくれるとうれしい」「毎年楽しみにしてくれている」と今西さんたちは語る。周りの人たちが喜んでくれることが、やりがいにつながっている。

気づきから活動へ

「動いたら風がおきる。じっとしていたら風はおきない」という思いからウィンズ（風）が発想され、「やさか野に吹く風、やさか野から吹く風」という意味を込めて団体の名称を「ウィンズやさか野」とした。「自ら動く風」になろうと、ウィンズや

★ 団体プロフィール ★

設立年＝平成18年9月
設立・運営主体＝自主的組織
代表者＝会長 今西 茅織
構成員＝140人
〈連絡先〉
〒627-0131
京都府京丹後市弥栄町和田野700
電話：0772-65-2903



左から新谷さん、今西さん、梅田さん



地域の文化祭で昔の暮らしや食べ物を紹介

さか野はイルミネーション事業を皮切りに、様々な活動に取り組んでいる。

活動はちょっとした気づきから始まっている。山へ行くと、季節によって様々な山野草が咲いている。こん

なにきれいな草花を、「ぜひ子どもたちにも見せてあげたい」と思い、地域の小中学校に届けるようになった。子どもたちが自然の豊かさや強さに気づくきっかけになればと、山で採ってきた草花に名前と簡単な説明書きを添え、季節ごとに届けている。特に先生たちに興味を持ってもらい、うちの学校にも置いてほしいという声がかかったり、子どもたちの前で話をしたり交流する機会も生まれている。

広がる活動の輪

活動を始めて3年ほど経過した頃から、公民館などから声がかかるようになり、地域の各種イベントにも運営側として参加するようになった。

弥栄町の文化祭では昔の暮らしを紙芝居で紹介したり、昔のおやつを実際に調理して紹介したりする企画や、室内でイルミネーションを行う



蓮池でお茶会を開催

など、好評を得ている。また、今年は初の取り組みとして、東日本大震災の復興に少しでもお手伝いできればと、東北の物産等の販売や、東日本大震災のパネル展示を行うなど、震災を忘れないよう呼びかけた。東北の応援はこれからも試行錯誤しながら続けていきたいと考えている。

文化祭以外にも、他団体と協力して小学生を対象に自然エネルギー教室を開催したり、町内にある蓮池でお茶会を開催したりと、活動の輪を広げている。

会員は現在、140名。活動経費は会員からの会費で賄っている。すべてのメンバーが直接活動に携わってはいないため、山歩きのイベントを企画するなど、会員同士の交流も図っている。

できることをする

「活動する上で何か課題はありますか」と筆者が質問したところ、「自分たちが楽しんでやっているのでも悩みはありません」という明るい答えがすぐ返ってきた。

活動が新聞などで取り上げられるにつれて、市内外にウィンズやさか野の存在が認知されるようになった。京都

府内の女性団体が「活動を間近で見たい」と訪れたり、府内で開催される市民団体による講演会に呼ばれたりするなど、市内外の団体との交流も広がっている。

「派手ではないけれど、みんなのために少しでも動こうとしている団体だと認めてくれているかなと感じている」と今西さん。「周りの人たちも協力してくれるし、良い循環ができていると思う」という。

「はりきって何かできるわけではない。自分たちができることをしているだけ。地域のことや、子どもたちのことや、自分たち仲間のことをいつでも考えているよという気持ちで、だんだんと事業を重ねるにつれて周りにも伝わり、絆がしっかりとってきたように思う」と今西さんは語る。

地域を元気にしようとか、決して大きな目標を掲げているわけではない。自分たちが楽しいと思うこと、自分たちができることをして、それが周りの人たちにも喜んでもらえるという想いが活動に繋がっている。そうしたささやかで地道ではあるが、心のこもった活動が地域に確かな交流や絆をもたらしている。

編集委員 ● 吉田 真実

書籍紹介

『農山村再生に挑む—理論から実践まで』



小田切 徳美 著
岩波書店（2013年8月29日発行）
定価：2,700円＋税

農山村とは、中山間地のみではなく、離島や遠隔地の平地農村、漁村なども含めた条件不利地域を表現する総称である。その農山村が高齢化や人口減少などにより衰退過程にあり、過疎化する農山村という認識から生まれた「限界集落」という言葉もマスコミなどを通じて一般的となっている。しかし、その言葉から連想されるのは、「消滅」である。

その一方で、地域の強い結びつきや自立性から「農山村は存続する力を持つ」という認識がある。農山村の持つ再生の力までもが消滅しているとは言えないからだ。

現在、農山村をめぐる「消滅論」と「存続論」がある中、農山村の内外からその地域を守り、発展させようという再生策が論じられるようになってきた。これが「農山村再生論」である。農山村の再生にあたっては、地域住民はもちろん、何らかの形で支援をしようと再生の現場にいるNPOや大学などの役割が大きく、そのネットワークは拡大しつつある。

本書は、農山村の存続に向けた「入門テキスト」として、「理論・政策」、「実態とそれへの対策」、「再生の戦略と政策」で構成され、農山村衰退の背景を冷静に分析し、再生のための処方箋を多面的に示している。地域問題に関心を持つ学生、地域リーダーはもとより、地方自治体や将来を担う若者に活用していただきたい1冊である。

『にぎわいの場 富山グランドプラザ 稼働率100%の公共空間のつくり方』



山下 裕子 著
学芸出版社（2013年10月1日発行）
定価：2,000円＋税

富山県富山市の中心市街地の一等地にある「富山市まちなか賑わい広場」（愛称：グランドプラザ）は、2007年9月に誕生した市の公共施設である。グランドプラザを覆うガラスの屋根は、雨や雪などから人々を守るとともに、空模様をまちなかの空間に取り込んでいる。開業以来、年間100件以上のイベントが開催され、休日の稼働率ほぼ100%を維持するこの広場は、いかにしてつくられたのか。この本には、その計画・誕生の経緯、賑わい創出の仕組み、運営方法などが、市民代表として2007年からグランドプラザ活用委員会に参加し、現在もグランドプラザの運営に携わっている山下裕子氏の言葉で記されている。

「もし、いまから広場をつくるなら、中心市街地の超一等地のもともと人通りの多い場所に、まちなか広場として整備しましょう。なぜなら、広場とは、空っぽな空間であり、広場単体ではなかなか目的地になり得ないためです」。本書で山下氏はこう語っている。そこに行くことが目的ではなく、その場で人とふれあい、何かをすることが目的となる公共施設。市民相互の交流の拠点であり活動の場であるグランドプラザは、そういう意味で大きな可能性を持った新しい形の公共施設と言えるだろう。

グランドプラザが市民の集まる空間となり得た背景には、まさに市民と行政との協働がある。協働への取り組みを実施しようとする方、この本を読んで実践のノウハウを学んでみてはいかがだろうか。



朝来市長 ● 多次勝昭

「あなたが好きなまち・朝来市」を目指して

朝来市は、兵庫県のほぼ中央に位置する人口約3万3千人のまちで、平成17年4月に旧朝来郡4町が合併して誕生しました。

瀬戸内海に流れる市川と、日本海にそそぐ円山川の源流を発する山々と、その麓に広がる田園など、豊かで美しい自然に恵まれています。

市内には、歴史・文化にあふれた見どころが多くあり、1200年の歴史を持つ生野銀山や鉾山に関する近代化産業遺産群をはじめ、近畿地方最大級の規模を持つ円墳「茶すり山古墳」、美術館を中心にさまざまな芸術作品を見ることが出来る「あさご芸術の森」、山陰地方随一の規模を誇る「大町藤公園」などがあります。

また、近年、国内外から多くの注目を集めていますのが、国史跡・竹田城跡です。

標高353メートルの古城山山頂に築かれた偉容は、別名・虎臥城とも呼ばれ、日本屈指の現存する総石垣の山城遺構として、平成18年には日本100名城に選定され、その後、秋の雲海をはじめとする幻想的な風景がマスコミなどに多く取り上げられたことから、爆発的な人気を集めており、平成17年には1万2千人ほどであった訪問者数が24年度には24万人近くまでの伸びを見せております。

市では、急増する観光客の受け入れ態勢を充実させるとともに、竹田城跡のみに立ち寄る観光客に少しでも長く滞在してもらうことができればと、風情ある竹田の城下町の整備に取り組んでおり、この11月10日には、造り

酒屋の建物を改築した「たけだ城下町交流館」を核施設としてオープンしました。

一方、増え続ける観光客による影響として、駐車場不足による渋滞とその対応、トイレなどの関連施設の整備と維持管理、また、入城者増加による影響から石垣に崩落の懸念が出るなどの弊害も発生しており、それら解消の経費の一部に充てることを目的にこの10月からは1人300円の観覧料をいただいております。今後は、史跡保存と観光とが両立することが課題となっています。

平成21年5月の市長就任以来、私は「対話を基調とした心優しい温もりの市政の実現」へ向け、「健康づくりと医療体制の充実」「支所機能の充実と地域協働」「子育て支援などの人口対策」「農林・商工業の振興」「行財政改革推進で市民満足度100%の実現」のテーマを掲げ、だれもが誇りを持てる朝来市づくりを進めています。

その実現へ向け「あなたが好きなまち・朝来市」をテーマに、来年度からの実施に向け、第2次朝来市総合計画を策定しました。

全国的な問題でもあり、朝来市も例外ではない人口減少や少子高齢化への対策として、「朝来市に人が集まり、留まるまちづくり」「若者世代を軸とした人口政策」を中心に、地域ブランドやイメージの確立、地域の絆づくり、生涯現役の場おこしなどに取り組む所存であります。

これからの朝来市に、皆様からのご支援ご協力をお願いいたしますとともに、自然と歴史あふれる朝来市にぜひお越しいただきますようお願いしております。



しいーんと
心に響く、冬の音。



北海道

撮影地：摩周湖（弟子屈町）＜Lake Mashu in Teshikaga＞
撮：2010年2月 撮影者：朝田 光男

（公社）北海道観光振興機構
TEL.011-231-0941
<http://www.visit-hokkaido.jp/>

H O K K A I D O

平成25年度 北海道観光ポスター（公益社団法人北海道観光振興機構）

北海道

都道府県漫遊
POSTER GALLERY

地域づくり 2013・12月号 46

下郷町は福島県会津地方の南部に位置し、周囲は那須山系などの山々に囲まれ、町のほぼ中央を南西から北東に阿賀川（大川）が貫流し、面積の約87%は森林に覆われる緑豊かな歴史のある町です。下郷町の観光地としては、江戸時代にタイムスリップしてしまったかのような茅葺き屋根の町並みが美しく、年間100万人が訪れる国選定伝統的建造物群「大内宿」、長い年月にわたり浸食・風化により塔状の奇観を示す天然の彫刻、国指定天然記念物「塔のへつり」、標高わずか800mの山に高山植物が群生する国指定天然記念物「中山風穴地特殊植物群落」、山深い溪谷に包まれた湯量豊富な「湯野上温泉」などがあり、いずれも自然豊かで心休まる場所です。

きっと出会える。きっと見つかる。心のふるさと下郷町にぜひ一度お越しください。



■中山風穴地特殊植物群落 標高わずか800mの山腹では、真夏でも5～10℃の冷気が噴き出し、自生しないはずの高山植物が見られる。写真はアイヅシモツケ(左)とオオタカネバラ



■塔のへつり 100万年の歳月をかけて浸食と風化を繰り返して出来上がった見事な景観。「へつり」とは方言で、この地方で断崖絶壁の危険な道や場所のことを言う

むかしといまが出逢える場所 下郷



■大内宿雪祭り 毎年2月第2土・日曜日に開催。宿場内には雪の灯籠が並び夜は花火の打ち上げが行われる



■湯野上温泉 山間のなかに民宿と旅館が点在し、湯量豊富な源泉100%の温泉



■なかやま雪月火 毎年2月第3土曜日に開催。雪月火とは、会津山間地ならではの「雪」と冬の夜空に青白く輝く「月」、そして「火」は、ろうそくの灯りを表し、約2000本の灯りが幻想的な世界をつくりだす（日本夜景遺産に認定）



平成26年度全国地域リーダー養成塾 塾生の募集!

全国地域リーダー養成塾は、様々な分野で既存の枠にとらわれない斬新かつ大胆な発想のできる地域のリーダーの養成を目的とした、体系的かつ効果的なカリキュラムによる研修です。

平成元年度から開講し、24年度までに813名の感性豊かな実力のある地域のリーダーを養成してきました。現在、25年度の塾生が研修を行っています。

熱意ある皆さんの積極的な参加をお待ちしています。

- 研修期間 平成26年5月から平成27年1月下旬
- 募集人数 40名
- 応募資格 地方公共団体等の職員、地域づくり団体等のメンバー（募集案内参照）
- 研修内容 地域づくりの専門家・実践家等による講義のほか、プレゼンテーション研修、ファシリテーション研修などのグループ演習を取り入れ、実践を重視した研修を行います。
また、主任講師による少人数のゼミナール形式の講座を開講し、塾生各自が地域のテーマを見つけ、調査・研究に取り組み、成果を修了レポートにまとめます。きめ細かい指導により、「自ら考える力」を養います。
- 申し込み 募集案内及び参加申込書は、センターのホームページ（「地域づくり百科」<http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp>）からダウンロードできます。
- 応募方法 平成26年1月17日（金）までに、各市区町村担当課へ応募書類を提出してください。
- 問い合わせ先 研修交流課（電話）03-5202-6135

通信
センター

『総務大臣表彰』等受賞団体の動画公開中

「地域づくり総務大臣表彰」や「ふるさとイベント大賞」を受賞した地域の活性化に励む優れた取り組みを10～15分ほどの動画にまとめ、様々な活動のヒントになるようにインターネット上で公開しています。

受賞団体の活動内容がよくわかり、関係者の生の声を聞くことができる動画によって、活字だけでは知ることのできなかった活動やイベントの様子も紹介されています。ぜひ地域づくりの一助としてお役立てください。

◆今年度公開予定の動画

- 平成24年度 地域づくり総務大臣表彰 27団体、3名及び表彰式
- 第17回 ふるさとイベント大賞 6イベント及び表彰式

地域活性化センターHPトップにある「地域づくりTV」（左側のバー）から視聴できます。

また、『地域づくりTV』でも検索できますのでご覧ください。

【問い合わせ先】 振興部地域支援課 TEL 03-5202-6137



★日本橋プラザビルイベントスペース

12月

- 12月5日(木)～6日(金)
宝塚市(兵庫県)
『モノ・コト・パ宝塚』物産フェア』

1月

- 1月16日(木)～17日(金)
菊川市観光協会(静岡県)
『菊川市物産展』
- 1月21日(火)
西さがみ観光協議会(神奈川県)
『西さがみ観光展・物産展』
- 1月27日(月)～28日(火)
いちき串木野市(鹿児島県)
『鹿児島県いちき串木野市の物産と観光展』
- 1月29日(水)～30日(木)
西尾市観光協会(愛知県)
『三河の小京都 愛知・西尾 観光物産展』



(写真)

- 1 10月3日(木)～4日(金)
京都丹波観光協議会(京都府)
- 2 10月15日(火)長野市の
観光と物産展実行委員会(長野県)
- 3 10月17日(木)～18日(金)
五泉市観光協会(新潟県)
- 4 10月21日(月)～22日(火)
東京シティプロモーション
事業実行委員会(三重県)
- 5 10月24日(木)～25日(金)
山口県
- 6 10月30日(水)～31日(木)
輪之内町(岐阜県)

【編集後記】

▼今月号は最近注目を集めている古民家の再生をめぐる各地の動きを特集しました。かつて全国各地に広範に存在していた歴史ある古い民家は都市化の波で減少し、残ったとしても空き家となっている例が多いようですが、それがまちづくりや地域活性化のための新たな地域資源として見直され、見事に再生し、風情ある佇まいを見せています。

▼マンションなどに暮らす都市住民にとってはこうした古民家は懐かしさを感じさせ、不思議な魅力に富んでいるようです。それだけに関係者の努力で再生された古民家は観光資源として、あるいは移住者用の住宅や都市と地域住民の交流拠点などとして新たな価値を生み出しています。特集事例を拝見しても興味深い様々な活用があることがよく分かり、参考になるのではないのでしょうか。

▼ところで今回の事例とは関係ありませんが、かつて私が子供のころ、通学で歩いていたのは宿場町でした。毎日の行き帰りに目にする古い家並みは、どこにもあるような田舎の集落そのものでしたが、どこか穏やかで落ち着いた雰囲気を感じていました。それが後年、重伝建地区に選定され、今では観光客が訪れるまでになっています。そして一部の住宅は観光客がちょっと休憩できるようなスペースに改装されています。こうした古民家に限らず、地域活性化のための資源は、見渡せば身近に数多く存在しているのかもしれない。(堀)

「1月号予告」
特集Ⅱ「少子化対策と子育て支援」(仮)

地域づくり12月号

2013年12月1日発行 編集・発行＝一般財団法人地域活性化センター
東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階 電話03-5202-6131(代) <http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/> 印刷・製本／株式会社丸井工文社

法律で許可された場合以外に、本誌からの無断転載を禁止します

落丁・乱丁はお取り替えます。地域づくり情報課(03-5202-6138)まで、ご連絡下さい。

豊かな街づくりに 役立つ宝くじ。

宝くじの収益金は、図書館や
動物園、学校や公園の整備を
はじめ、少子高齢化対策や
災害に強い街づくりまで、
いろいろなかたちで、みなさまの
暮らしに役立てられています。



財団法人 日本宝くじ協会は、宝くじに関する調査研究や公益法人等が行う社会に貢献する
事業への助成を行っています。 日本宝くじ協会ホームページ <http://jla-takarakuji.or.jp/>

